岡山大学構内遺跡調査研究年報 7

１９８９年度

１９９０年１１月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡調査研究年報 7

１９８９年度

１９９０年１１月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

ここに収録されました報告は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが1989年度に行った業務の概要であります。

本年度もまた関係当局の御理解とお力添えにより，整理室150㎡の増築をはじめ多大な御援助を頂きました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

本年度はセンターとしては大きな発掘調査がなかったこの時期をとらえて，新しい試みとして発掘成果展を持ちました。調査室の発足以来の遺物・成果もかなりの量に達し，学内外の多くの方々に公開して，本センターの活動に対してより一層の御理解を頂くためにであります。また，こうした埋蔵文化財の意義をより具体的に理解して頂くため野外考古学体験教室を開きました。こうした活動の中で調査研究活動もまた高められるものと信ずるものであります。

本年度の発掘調査としては，工学部生物応用工学科棟新営及び教育学部身体障害者用エレベーター設置に伴うものと大学院自然科学研究科棟新営に伴う合併処理槽建設予定地・学生合宿所予定地及び附属図書館予定地の試掘調査並びに当センターとして実施した半田山城の平板による実測調査が主要なものであります。特に，生物応用工学科棟予定地の本年度の発掘では縄文時代の貯蔵穴が検出され，アンペラを敷いたものも発見されたことは報告書に先立つ報告として特記すべきものであります。

埋蔵文化財の調査研究活動は日々の発掘によって深められる必要がありますが，それによって出土した遺物の公開と保存もまた必要となってきます。関係各位の一層の御理解をお願いする次第であります。

本年度もまた岡山県教育委員会文化課，岡山県古代吉備文化財センター，岡山市教育委員会文化課，岡山大学文学部考古学研究室をはじめ関係の多くの機関・各位から御協力・御指導を賜りました。最後になりましたが記して厚く御礼申し上げる次第であります。

1990年11月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

高　重　進

例　　言

1　本年報は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において1989年４月１日から1990年３月31日に行った活動成果をまとめたものである。

2　大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては，設定基準を次のように定めた。

1）津島地区では，国土座標第５座標系（X＝－144,500，Y＝－37,000）を起点とし，真北を基軸とした構内座標を設置した。一辺50ｍの方形地区割である。また，同地区では調査の便宜上，大きく津島北地区と同南地区に二分する（図版１～３）。

2）鹿田地区では，国土座標第５座標系（X＝－149,800，Y＝－37,400）を起点とし，座標軸をＮ15°Ｅに振ったものを基軸とした構内座標を設置した。地区割は一辺５ｍの方形を用いている（図版４）。

3）本文中で用いる方位は津島地区・鹿田地区ともに真北を使用している。

3　岡山大学構内および関連施設内の遺跡の名称は，農学部旧演習林内に分布する古墳群などの周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。津島地区構内で新たに発見された遺跡は，遺存する小字名を用いるか，岡山大学津島地区遺跡群と仮称し，地点ごとに任意の記号をもって示す。また，鹿田地区では全域において，これまで称されてきた「鹿田遺跡」を用いる。

4　表に記載した所属部は，原則として各学部の頭文字を略号として用いている。

5　本文・目次・挿図・図版などで使用の調査番号は表１と一致する。

6　本文は，石坂俊郎・絹川一徳・土井基司・新納泉・安井宣也・山本悦世・若林卓が分担執筆し，執筆者名は末尾に記した。

7　編集は髙重進センター長・新納泉室長の指導のもとに山本が担当した。

8　本年報に掲載の津島地区の地形図は岡山市発行の1/2500の地図を複製したものである。

9　調査・整理において以下の方々にご援助・教示を頂いた。記して感謝申し上げる。

伊藤晃，稲田孝司，岡本素六，小田嶋梧郎，河村吉行，河本清，粉川昭平，近藤義郎，鈴木茂之，千葉喬三，辻誠一郎，時枝克安，根木修，能城修一，林謙作，春成秀爾，平井勝，藤尾慎一郎，松井章，松島義章，松谷暁子，光谷拓実，宮本一夫，宮本長二郎，村上幸雄，柳瀬昭彦，山本進一

岡山大学構内遺跡調査研究年報７　1989年度

目　　次

第１章　岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項 …… 1

1　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定 …… 1

2　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規定 …… 2

3　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規定 …… 3

第２章　1989年度岡山大学構内遺跡調査報告 …… 6

1　調査の概要 …… 6

2　発掘調査 …… 8

①　工学部生物応用工学科棟新営に伴う発掘調査 …… 8

②　教育学部身体障害者用エレベーター設置に伴う発掘調査 …… 11

3　試掘調査 …… 14

①　合併処理槽（大学院自然科学研究科）建設予定地 …… 14

②　学生合宿所予定地 …… 16

③　附属図書館予定地 …… 18

4　立会調査 …… 21

(1)　津島地区 …… 21

(2)　鹿田地区 …… 22

5　その他の活動 …… 22

(1)　半田山城平板測量 …… 22

(2)　分布調査（三朝・本島） …… 23

第３章　1989年度普及・研究・資料整理活動 …… 25

1　資料整理 …… 25

2　分析依頼 …… 25

3　刊行物 …… 26

4　調査員の活動 …… 26

5　日誌抄 …… 28

6　遺物収蔵量および保管施設 …… 29

7　展示会 …… 31

第４章　1989年度構内遺跡の調査および活動のまとめ …… 33
附　表 …… 34
附　編　半田山城測量後記 …… 40

挿　図　目　次

図１　工学部生物応用工学科棟予定地　土層柱状図 …… 9
図２　17層上面検出貯蔵穴群 …… 10
図３　出土遺物 …… 10
図４　教育学部身体障害者用エレベーター予定地　調査地点図 …… 11
図５　調査区西壁土層断面図 …… 11
図６　遺構平面図・断面図 …… 12
図７　出土遺物 …… 13
図８　大学院自然科学研究科合併処理槽予定地　調査地点図 …… 14
図９　土層柱状図 …… 15
図10　学生合宿所予定地　調査地点図・土層柱状図 …… 16
図11　13層上面畦畔平面図 …… 17
図12　附属図書館予定地　調査地点図 …… 18
図13　土層断面図 …… 19
図14　７層上面遺構検出状況 …… 20
図15　出土遺物 …… 20
図16　立会調査⑫　土層柱状図 …… 21
図17　三朝団地周辺遺跡分布図 …… 23
図18　本島遺跡分布図 …… 24
図19　展示会場見取図 …… 32

表　目　次

表１　1989年度調査一覧 …… 6
表２　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要 …… 29
附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度） …… 34
附表２　1988年度以前の構内主要調査（1983～1988年度） …… 34
附表２－(1)　発掘調査 …… 34
附表２－(2)　試掘調査 …… 35
附表２－(3)　立会調査 …… 36
附表３　埋蔵文化財調査室刊行物 …… 39
附表４　埋蔵文化財調査研究センター刊行物 …… 39

図　版　目　次

図版１　津島地区全体図
図版２　津島北地区
図版３　津島南地区
図版４　鹿田地区全体図
図版５　津島地区（工学部生物応用工学科棟予定地発掘調査）
　１　アンペラ出土状況（SP02，東から）
　２　17層上面検出貯蔵穴群（東から）
図版６　津島地区（教育学部身体障害者用エレベーター予定地発掘調査）
　１　完掘状況（東から）
　２　西壁土層断面（東から）
図版７　津島地区（学生合宿所予定地試掘調査）
　１　北壁土層断面（南から）
　２　13層上面検出畦畔（東から）

3　13層上面畦畔断面（東から）
図版８　津島地区（附属図書館予定地試掘調査）
1　７層上面検出水田（TP1，西から）
2　溝１・２断面（TP2，東から）
図版９　津島地区（埋蔵文化財調査研究センター施設）
1　埋蔵文化財調査研究センター施設（西南から）
2　常設展示室

第１章　岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

１　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定

（設　置）

第１条　岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

（目　的）

第２条　センターは，本学の敷地内の埋蔵文化財について，次の各号に掲げる業務を行い，もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

（センター長）

第３条　センターにはセンター長を置く。

２　センター長は，専門的知識を有する本学の教授の中から学長が命ずる。

３　センター長は，センターに関する業務を掌理する。

４　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

（調査研究室）

第４条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室に室長，調査研究員及びその他必要な職員を置く。

３　室長は，専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命ずる。

４　室長は，センター長の命を受け，センターの業務を処理する。

５　室長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

６　調査研究員及びその他の職員は，上司の命を受け，センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第５条　センターに，センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため，調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

２　専門委員は，本学の教官の内から学長が命ずる。

３　専門委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。

（管理委員会）

第６条　本学に，センターの管理運営の基本方針を審議するため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

２　管理委員会に関する規定は，別に定める。

（運営委員会）

第７条　センターに，センターの運営に関する具体的な事項を審議するため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

２　運営委員会に関する規定は，別に定める。

（事　務）

第８条　センターの事務は，施設部企画課において処理する。

（雑　則）

第９条　この規定に定めるもののほか，センターに関し必要な事項は，学長が別に定める。

附　則

１　この規定は，昭和62年11月26日から施行する。

２　この規定施行後最初に任命されるセンター長，室長及び専門委員の任期は，第３条第４項，第４条第５項及び第５条第３項の規定にかかわらず，昭和64年３月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い，もって埋蔵文化財の保護を図るため，学内施設として，新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

２　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規定

（趣　旨）

第１条　この規定は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定（昭和62年岡山大学規定第48号）第６条第２項の規定に基づき，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に関し，必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　管理委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

（組　織）

第３条　管理委員会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

一　学長

二　各学部及び教養部長

三　自然科学研究科長

四　資源生物研究所長

五　附属図書館長

六　各附属病院長

七　地球内部研究センター長

八　学生部長

九　医療技術短期大学部主事

十　事務局長

十一埋蔵文化財調査研究センター長

（委員長）

第４条　管理委員会に委員長を置き，学長をもって充てる。

２　委員長は，管理委員会を召集し，その議長となる。

３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第５条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

（幹　事）

第６条　管理委員会に幹事を置き，庶務部長，経理部長及び施設部長をもって充てる。

（庶　務）

第７条　管理委員会の庶務は，施設部企画課において処理する。

附　則

この規定は，昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し，必要な事項を定めるため。

＜管理委員会委員＞

学　　長	高橋　克明	教養部長	石井　　旭
文学部長	坪井　清彦	自然科学研究科長	本田　和男
教育学部長	秋山　和夫	資源生物研究所長	河崎　利夫
法学部長	上野　雅和	附属図書館長	定兼　範明
経済学部長	土生　芳人	医学部附属病院長	田邊　剛造
理学部長	萬成　　勲	歯学部附属病院長	井上　　清
医学部長	金政　泰弘	地球内部研究センター長	秋本　俊一
歯学部長	加藤慶二郎	学生部長	坂田　　洼
薬学部長	大和　正利	医療技術短期大学部主事	喜多嶋康一
工学部長	鳥居　　滋	事務局長	城倉　英人
農学部長	中村怜之輔	埋蔵文化財調査研究センター長	髙重　　進
幹　事			
庶務部長	川崎　　晃	経理部長	倉部　隆司
施設部長	渋谷　政利		

3　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規定

（趣　旨）

第１条　この規定は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定（昭和62年岡山大学規定第48号）第７条第２項に基づき，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し，必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　運営委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

（組　織）

第３条　運営委員会は，次の号に掲げる委員で組織する。

一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二　本学の教授のうちから学長が命じた者若干名

三　センターの調査研究専門委員から学長が命じた者１人

四　センターの調査研究室長

五　施設部長

2　前項第２号の任期は，１年とし，再任を妨げない。

（委員長）

第４条　運営委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。

2　委員長は，運営委員会を召集し，その議長となる。

3　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第５条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

（庶　務）

第６条　運営委員会の庶務は，施設部企画課において処理する。

附　則

1　この規定は，昭和62年11月26日から施行する。

2　この規定施行後最初に任命される第３条第１項第２号の委員の任期は，同条第２項の規定にかかわらず，昭和64年３月31日までとする。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し，必要な事項を定めるため。

＜運営委員会委員＞

教育学部教授	髙重　進　（センター長）	教養部教授	定兼　範明
文学部教授	近藤　義郎	歯学部教授	小田嶋梧郎（調査研究専門委員）
工学部教授	本田　和男（管理委員会委員）	文学部助教授	新納　泉（調査研究室長）
医学部教授	中山　沃	施設部長	渋谷　政利

運営委員会審議事項

1989年４月19日	1988年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
	調査研究室長の交替について
1989年５月16日	1989年度埋蔵文化財調査研究センター予算について
1989年９月26日	展示会（案）について
1990年３月９日	1990年度事業計画（案）について
	1989年度活動報告
	調査研究員等の退職について

管理委員会審議事項

1989年４月26日	1988年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
	調査研究室長の交替について
	調査研究員等の退職について
1989年５月24日	1989年度埋蔵文化財調査研究センター予算について

センター組織一覧

＜学　長＞

管理委員会

学長：委員長

各学部長・教養部長　　附属図書館長

自然科学研究科長　　各附属病院長

資源生物研究所長　　学生部長

地球内部研究センター長　　事務局長

医療技術短期大学部主事　　埋文センター長

＜埋蔵文化財調査研究センター長＞……（併）　髙重　進（教育学部教授）

運営委員会

センター長：委員長

学長任命の本学教授若干名

調査研究専門委員から１人

調査研究室長・施設部長

＜調査研究専門委員＞

小田嶋梧郎（歯学部教授）

千葉　喬三（農学部教授）

＜調査研究室長＞……（専・文学部助手）　山本　悦世　（５月15日まで）

（併・文学部助教授）　新納　泉　（５月16日から）

＜調査研究員＞……（専・文学部助手）　石坂　俊郎，絹川　一徳

土井　基司，藤原　千鶴

山本　悦世，若林　卓

（専・技術補佐員）　安井　宣也

＜補　助　員＞……（岡大法学部学生）　竹内　浩一，中塚　孝信

（岡大経済学部学生）　福田　真久，前原　伸也

＜室内作業員＞……　佐々木育子

恩藤　富子，仲野　照子

萩野　早苗，大橋かおり

第２章　1989年度岡山大学構内遺跡調査報告

１　調査の概要

当センターにおいては，大学構内における掘削工事に際して，事務局施設部企画課を通じて行政的手続きを行った上で，発掘・試掘・立会調査にわけて調査を実施している。

現在までのところ，その調査対象は津島地区と鹿田地区が中心となっている。特に，鹿田地区は周知の遺跡（鹿田遺跡）に指定されており，掘削工事に対して届出を提出した上で対応を行っている。また，津島地区においても新たな遺跡の確認が進んでいることから，届出の有無にかかわらず，少なくとも立会調査を行っている。

1989年度は発掘調査２件（津島地区），試掘調査３件（津島地区），立会調査46件（津島地区35件・鹿田地区11件）を実施した。詳細は表１に挙げた（表１・図版１～４）。　　（山本）

表１　1989年度調査一覧

番号	種類	所属	調査名称		調査地区	調査期間	掘削深度(m)	備考
①	発掘	工	生物応用工学科棟		津島北 AV・AW 04・05	4,1～5,31	1.8～3.5	調査面積600㎡ 縄文後・晩期の貯蔵穴と河道
②	〃	教育	身体障害者用エレベーター		〃 AZ・BA 05	11,27～12,13	2.5	調査面積38.5㎡ 縄文時代後～晩期の落込み 縄文時代後期～中世土器片
③	試堀	大自	合併処理槽設置予定地		〃 AZ 17	8,23～9,9	4.0	中世～明治の水田の畦畔・溝 〈1989年度工事立会〉
④	〃	学	学生合宿所予定地		津島南 BD 02	9,18～9,26	2.0～3.2	縄文晩期～弥生前期の畦畔 〈1989年度工事立会〉
⑤	〃	図	図書館新営予定地		津島北 AV・AW 13	2,20～3,14	3.0	古代水田 弥生～古代の溝
⑥	立会	薬	南テニスコート排水溝付設		津島南 BE 17・18	4,7	0.6	造成土内
⑦	〃	大自	大学院自然科学研究科棟新営工事	電柱架設	津島北 AZ 09,BA・BB 09	4,15	1.8～2.2	造成土 約1.0m
⑧	〃			工事用道路設置	〃 AZ 08	4,18～4,20	1.4	弥生後期水田，近世溝検出
⑨	〃			廃土置き場設置	〃 AZ 08	5,13	0.8	造成土 0.7m
⑩	〃	工	生物応用工学棟新営工事	電柱架設	〃 AV 04・05	5,18	1.5～1.9	〃 0.7～1.2m
⑪	〃			工事用道路設置	〃 AW 04	6,1	0.9	造成土内
⑫	〃	〃	情報工学科棟地下部分掘削		〃 AV 06	6,12・19～22	6.0	標高-0.5mまで掘削，遺物無
⑬	〃	農	圃場整備		津島南 BH 19	11,14	0.8	造成土内
⑭	〃	図	図書館テニスコート設営		津島北 AW 12	'90,1,9・10	0.6	〃

番号	種類	所属	調査名称		調査地区	調査期間	掘削深度(m)	備考
⑮	立会	学	樹木移植		津島南 BB・BC 02,BD 07 BF 04・07・08 BE 04,BG 07	1,23・24	0.3～0.6	造成土内
⑯	〃		岡山市道本町津島東線幅員拡幅工事並び補償工事	樹木移植	津島北 AV 05～10	1,23～2,2	0.2～1.5	造成土 1.5m
⑰	〃			工作センター作業場移転	〃 AV 09	2,5	1.2	造成土内
⑱	〃			学生合宿所新営	津島南 BC 02	2,7・8	1.2	造成土 1.2m
⑲	〃			市道拡幅工事	津島北 AU 07・08	3,20～25	0.5	造成土内
⑳	〃	文	樹木移植		〃 AX・AY 17,AZ 17	1,25	0.4	〃
㉑	〃	大自	合併処理槽	地質調査	〃 AY 17	2,7	2.3	造成土 2.0m
㉒	〃			周辺樹木移植	〃 AZ 17	2,8	0.2～1.0	造成土内
㉓	〃			本体部分堀削	〃 〃	2,21～3,6	3.0	〈1989年度試掘調査済〉
㉔	〃	事	国際交流会館駐輪場改修		津島南 BB・BC 26	2,7	0.4	造成土内
㉕	〃	図	駐輪場改修		津島北 AX 12	2,13・14	0.9	造成土 0.9m
㉖	〃	埋文	埋文センター	収蔵庫増築	〃 AU 11	2,20, 3,2・9	0.2～0.5	造成土内
㉗	〃			舗装他	〃 〃	3,14・15	0.2～0.3	〃
㉘	〃	学	体育附属施設新営		津島南 BD 05	2,21～23	1.4	攪乱内
㉙	〃	教養	樹木移植		〃 BB・BC 08	2,24	0.5	造成土内
㉚	〃	工	本館排水管設置		津島北 AX 09	3,5	0.2	〃
㉛	〃	教育	電柱アース付設		〃 AY 06	3,5	0.6	〃
㉜	〃	教養	〃		津島南 BF 07	3,7	0.6	〃
㉝	〃	理	水質測定室薬液庫設置		津島北 BA 10	3,8	0.4～0.5	〃
㉞	〃	工	実験棟排水管設置		〃 AV 10	3,15	0.5～0.7	〃
㉟	〃	事	バリケード設置		津島南 BC 13,BD・BF 12	3,17	0.9	〃
㊱	〃	法文経	2部学友会ボックス排水管設置		津島北 AZ 14	3,22	0.7	〃
㊲	〃	事	大学南宿舎駐輪場改修		津島南 BI 18・19	3,23～26	0.2	〃
㊳	〃	文	樹木移植		津島北 AX・AY 14,BA 16	3,27・28	1.5	〃
㊴	〃	教養	車庫通路拡幅		津島南 BC 08	3,28	0.2	〃
㊵	〃	薬	駐車場改修・樹木移植		〃 BB・BC 16	3,29	0.1～0.2	〃
㊶	〃	医病	旧管理棟解体に伴う配線移設	アース板埋設	鹿田 CO 27	8,21	1.3	近代水田層内
㊷	〃			配線埋設	〃 CO 26・27	8,21	0.4	造成土内
㊸	〃	〃	旧管理棟跡地環境整備	排水溝設営	〃 CF～CL 32・35 39・42	12,11・18・19・21・25	0.4～0.8	〃

番号	種類	所属	調査名称		調査地区	調査期間	掘削深度(m)	備考
㊹	立会	医病	旧管理棟跡地環境整備	樹木移植	鹿田 CE 31～43 CH 34～37 CM 31～44	12,15	0.8～1.0	造成土内
㊺	〃			外灯配線埋設	〃 CE～CM 29・45 CE・CM 30～44	12,22・25・26	0.5	〃
㊻	〃			〃 基礎掘削	〃 CE 30・37・44 CJ・CK 45 CL 28・29 CM 35・42	'90,1,8 〃	1.2～1.5 1.4	造成土 0.7～1.0m 中世層確認 攪乱内
㊼	〃			街渠桝設営	〃 CG 28・29 CH・CK 45 CJ 28・29 CL・CM 29	1,18	0.4～0.8	造成土内
㊽	〃			既設排水溝敷替	〃 CL・CM 45,CM 44	1,22	0.4	〃
㊾	〃			散水栓・旧排水管埋設	〃 CD 29～39,CE 29	1,29	0.3	〃
㊿	〃	〃	構内地下タンク埋設配管改修		〃 BG・BH 10	2,3	0.8	攪乱内
51	〃	医短	駐輪場取り付け工事		〃 CT 20～25 CM・CN 12	2,26・27	0.3～0.6 0.6	造成土内 〃

2　発掘調査

①　工学部生物応用工学科棟に伴う発掘調査（津島北地区 AV・AW 04・05区）

調査の経過

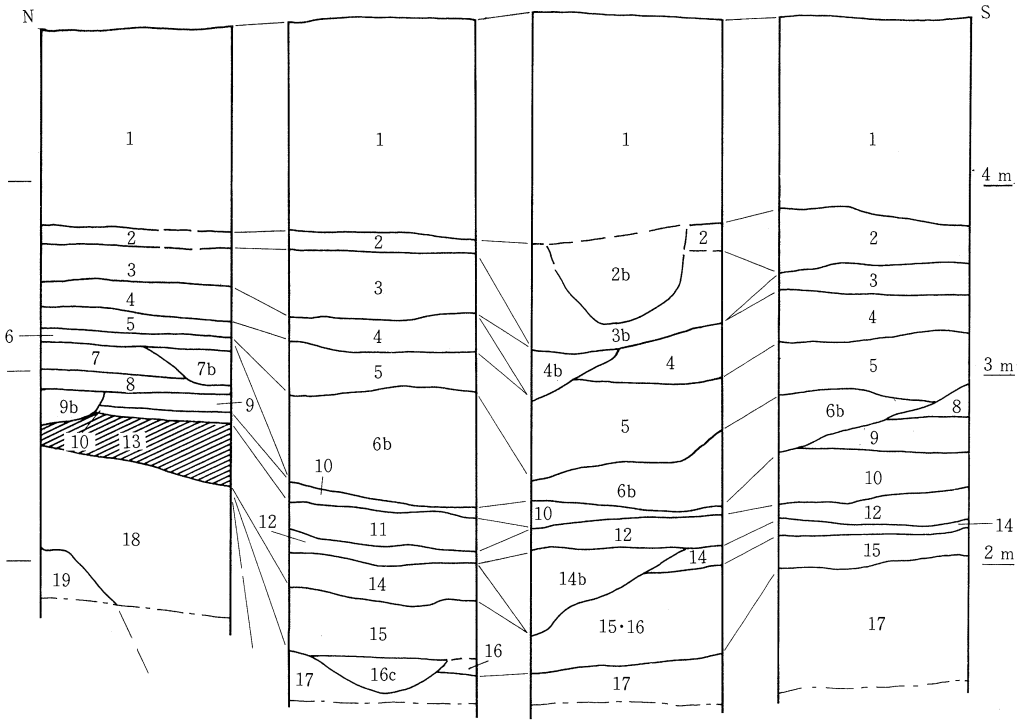
工学部生物応用工学科棟新営にあたり，1988年４月から５月に予定地内において試掘調査を行い，弥生時代前期～近世の遺跡の存在が確認された。その結果，同年９月20日に発掘を開始し，1989年３月末日を終了予定とした。しかし，調査開始後，試掘調査では確認されなかった縄文時代の遺構・遺物の存在が判明したため，調査期間を延長して同年５月末日までとした。調査地点は，工学部土木工学科棟と馬場の間に位置する。発掘面積は約600m²である。なお，前年度中に11・13層上面(弥生時代前期)まで調査が終了しており(註1)，本年度は，12層以下の調査を行なった。調査終了は５月末日である。1989年５月20日に現地説明会を開催した。

層序と遺構（図１・２）

基本的な層位については，既に報告済みなので，本年度調査に関係するもののみ説明する。12層は，弥生時代前期頃の耕作土と考えられるが，水田に関連した遺構は検出されなかった。13層は３層に細分できる。上層は弥生時代前期頃の耕作土と推定している。11層の上面から続く段状の地形が確認された。中層は縄文時代晩期頃を中心とする時期の包含層で，下層からは縄文時代後期の土器が僅かに出土している。14層は縄文時代晩期～弥生時代前期の包含層で，

低地部のみ認められる。上面で蛇行する東西方向の溝を１条検出した。15層と16層はともに，黒色粘土と暗灰色粘土が互層になって河道内に堆積した層で，15層は縄文時代晩期，16層は後期頃の土器を包含する。16層上面で2基の貯蔵穴を検出したが，そのうちの１基（SP02）には，底に敷いたと思われるアンペラが非常に良好な状態で残存していた。完全な保存処理を行なう余裕がなかったので，周囲を発泡ウレタンで密封して取り上げ，そのままの状態で保管しておくことにした。(註2) 1990年度中に元興寺文化財研究所に依頼して保存処理を行う予定である。貯蔵穴の時期については，15層や16層との関係から縄文時代後期～晩期頃と推測される。17層以下は基盤層と捉えているが，17層上面では11基の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴内からほとんど遺物が出土してないので正確な時期は不明だが，現在のところ、縄文時代後期頃と考えている。

（土井）



3b・4b・6b・7b・9b・14bは各層検出溝
16cは貯蔵穴

1　造成土
2　灰褐色粘質土
3　黄灰褐色粘質土
4　暗灰褐色　〃（中世）
5　淡灰褐色砂質土
6　暗灰褐色　〃（古代）
7　暗赤褐色粘質土（古墳後期）
8　明灰褐色粘質土
9　暗褐色粘質土（弥生）
10　暗灰褐色砂質土（縄文晩期～弥生）
11　淡黒色砂質土
12　暗褐色粘質土
13　黒褐色土（弥生前期）
14　黒褐色砂質土
15　黒色粘土（縄文晩期）
16　黒色粘土（縄文後期）
17　暗灰色粘質土
18　黄褐色砂質土
19　混砂礫

図１　土層柱状図　（縮尺1/40）

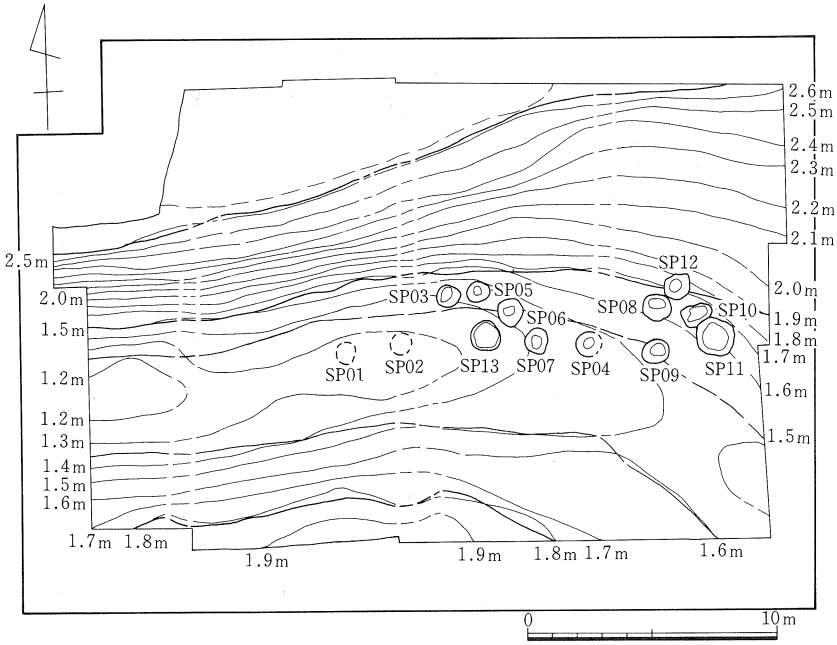
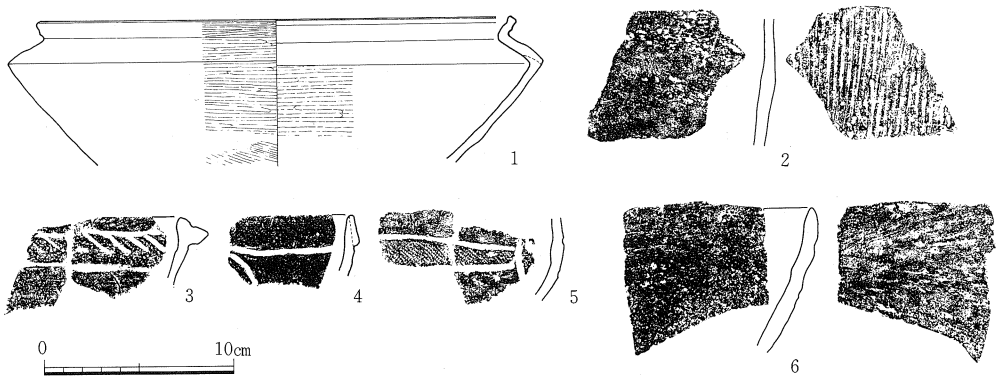


図２　17層上面検出貯蔵穴群　（縮尺１/300）　SP01とSP02は16層上面検出



番号	器種	出土層位	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	縄文土器浅鉢	15層	口縁部内面に浅い沈線，肩部内面ケズリ，外面と胴部内面横ミガキ	(内)黒褐（外)黄灰褐～淡黒褐	細砂～微砂
2	〃　深鉢	〃	外面に縦方向の貝殻条痕顕著，内面削り	(内)淡黒褐（外)明黄褐	細礫僅か，粗砂～細砂
3	〃　〃	16層	口縁端面・口縁部直下に沈線，口縁端面下半に縄文と刻み，波状口縁？	(内)淡灰黒(外)明黄褐～淡灰黒	細砂～微砂
4	〃　浅鉢	〃	口縁部を若干肥厚，口縁部直下に沈線，波状口縁？	淡黄褐	細礫僅か，粗砂～微砂
5	〃　〃	〃	外面は，沈線と沈線の間に縄文，縄文以外の部分は横ミガキ	(内)黄灰褐（外)淡茶褐	粗砂～細砂
6	〃　深鉢	〃	粗い不定方向のナデ，器面の凸凹が激しい	(内)暗黄褐（外)明黄褐	細礫僅か，粗砂～細砂

図３　出土遺物　（縮尺１/４）

註１　調査の概要は前年度年報を参照されたい。

『岡山大学構内遺跡調査研究年報』6　1989　16頁　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

註２　密封方法は前年度年報に報告済みである。

『岡山大学構内遺跡調査研究年報』6　1989　32頁　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

② 教育学部身体障害者用エレベーター設置に伴う発掘調査（津島北 AZ・BA05区）

調査の経過

教育学部身体障害者用エレベーター設置に伴い，11月27日～12月13日に発掘調査を実施した。

調査区は教育学部講義棟西辺に接し，上端は東西6.0m，南北8.5mであるが，造成土部分に法面をもたせるため，実質的には東西5.5m，南北7.0m，面積38.5m²である。ただし，南辺と西辺は既設施設建設に伴う攪乱部分にかかっており，有効な調査面積はさらに狭い（図4）。上部の造成盛土はバックホウを用いて除去し，以下の堆積層は人力で掘り下げた。縄文時代後期堆積層上部と思われる12層上面まで全面を調査し，以下については，調査区北・西辺で深掘を行った。深掘の結果，層序は単調で遺構・遺物とも確認されなかったため，掘り下げはその状態で止め，記録を終了したのち埋め戻した。

層　序（図5）

調査区周辺は，標高約4.6mである。1層は造成土で，厚0.8mである。以下，2層（灰色微砂）は近代耕作土層，3～5層（灰色砂質土）は中・近世層，6層（灰色粘質土）は遺物に乏しいため断定はできないが，他の調査地点でも特徴的な古代層，7層（黄灰色砂質土）・8層（淡灰褐色砂質土）は弥生時代層，9層（黒褐色土）は縄文時代晩期～弥生時代前期層，10層（暗灰褐色砂質土）は縄文時代後期層にほぼ位置付られる。9層は，縄文時代晩期～弥生時代前期の微高地上に特徴的な土層であることがこれまでの諸調査から知られており，当地点でもそれが確認されたことから，当時の微高地のほぼ頂部に当たっていると思われる。9層上面の標高は3.3mである。

後述のとおり，10層上面～11層上面では，いくつもの小規模な落込みが検出された。11層（黄褐色砂），12層（淡

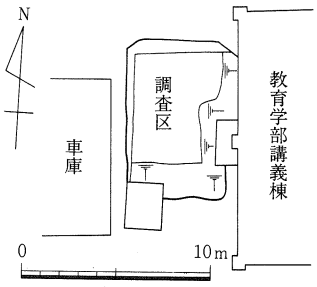
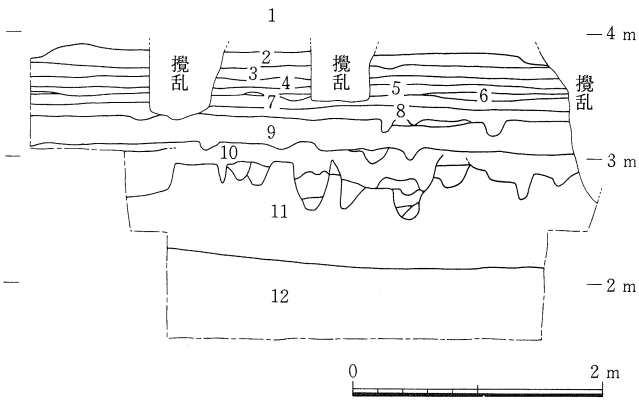


図4　調査区　（縮尺1/400）



1　造成土
2　灰色微砂
3　灰色砂質土
4　灰色砂質土
5　灰色砂質土
6　灰色粘質土
7　黄灰色砂質土
8　淡灰褐色砂質土
9　黒褐色土
10　暗灰褐色砂質土
11　黄褐色砂
12　淡灰緑色粘土

図5　調査区西壁土層断面図　（縮尺1/60）

灰緑色粘土）は部分的に深掘下にとどまったが，混ざりけがなく，遺物も含まなかった。縄文時代後期か，それを大きく遡らない頃の堆積であろう。

通観すると，９層以上は基本的に水平堆積だが，10層以下は，やや東に傾斜している。

遺　構（図６）

２～８層にかけては攪乱が甚だしく虫食い状で，２層上面で，南北方向の畝が検出されたにとどまる。９層上面はとりわけ精査に努めたが何も検出できなかった。

９層を除去すると様相は一変し，調査区全面に大小の落込みが群在する状況となった。部分的に重複が多いこと，埋土がいずれも似ていることなどから，個々の形態を必ずしも正確に把握しきれなかったが，大まかには，

①径30～40cm，深さ30cm前後の円・楕円形のもの

②長径70～80cm，短径50cm未満，深さ20～30cmのやや四角いもの

③径30～40cm，深さ20cm前後の皿状のもの

④幅50cm前後，長1.0m以上，深さ30cm前後の溝状のものに分けられる。

配置に規則性は感じられないが，④については，向きが四方位（東西南北）にほぼ沿っているようにもみえる。遺物を伴うものは④の※印の落込みであるが，土器小片５点にすぎない。

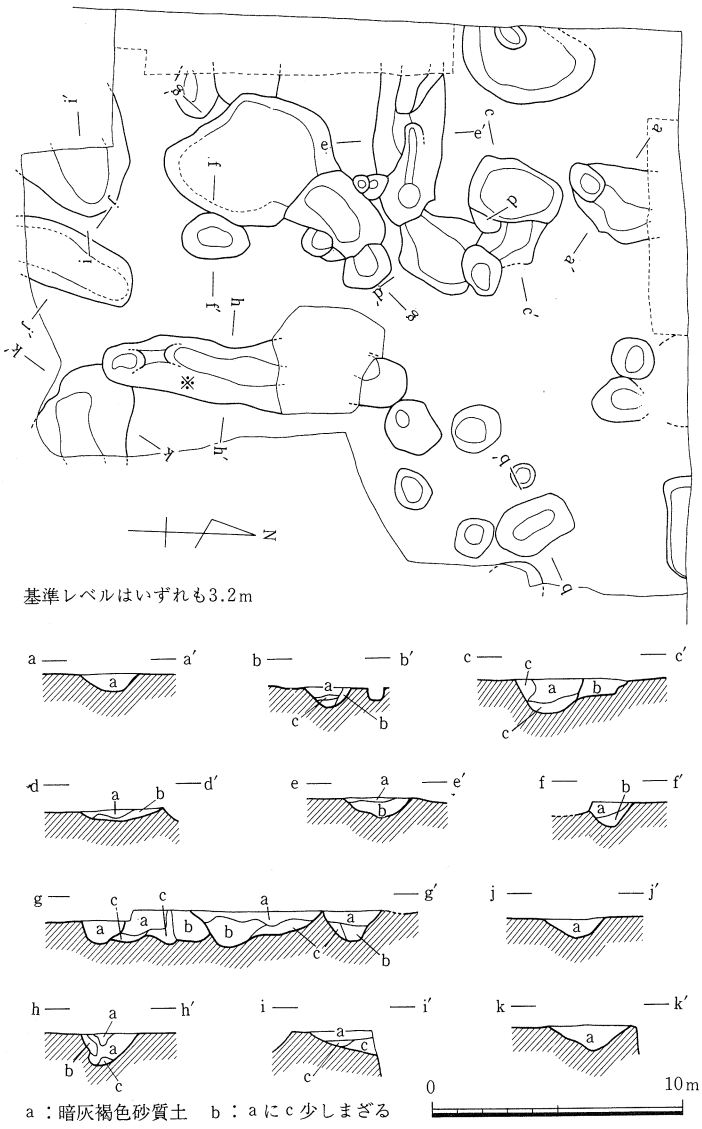


図６　遺構平面図・断面図　（縮尺１/100）

遺　物（図７）

各層を通じて遺物は少ないが，３層で土師質土器片２点・須恵器片２点，４～５層にかけて土師質土器片29点・須恵器片２点，９層上面で弥生土器（？）片13点（大半は同一個体の壺と思われる），10層で縄文土器19点，遺構※印の落込みから縄文土器片５点，11層から縄文土器（？）片２点，の内容である。石製品・金属製品は出土しなかった。それらのうちから特徴を伺い得るものを図示した。１は須恵器だが，短冊状の製品の断片で，わずかに湾曲する。２は須恵器高台。３～５は縄文土器で，４は後期中頃，３・５もそれを大きく下るものではないだろう。10層および遺構の帰属時期も，それに支持される。

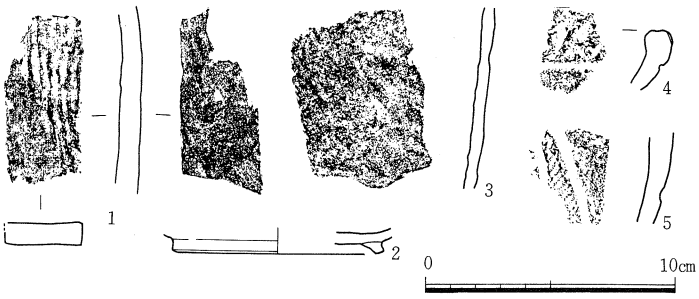


図７　出土遺物　（縮尺１/３）

結　語

今回の調査の成果は，

①９・10層土の存在から，当地点が縄文時代後期～弥生時代前期の微高地上にあたることが確認された。

②縄文時代後期～晩期と思われる遺構が検出された。

この２点に集約できるだろう。

また，層序を通観すると，古墳時代堆積層が認められない点に気づく。この状況は津島地区の他の微高地地点に共通し，奈良時代以降のある段階で広域的に削平されたものと考えている。

９層上面は，明確に傾斜がないこと，また，標高が3.3ｍに達していることから，微高地の最高部に当たっていると思われる。しかし，何の遺構も確認できず，遺物もなかった。調査面積が小さい上，最上面が削平されている可能性は残るが，水田，集落その他，微高地の利用のされ方の違いは，その分布を見極める作業とともに注意していきたい。

10～11層で検出された小規模な落込み群は，目下性格不明である。そのいくつかは，木痕等，非人為的痕跡であるかもしれない。ただし，教養部身体障害者用エレベーター建設予定地の調査（1987年度実施）や工学部情報工学科棟予定地の調査（1988年度実施）では，ほぼ同じ時期の土層で似た状況を呈しており，局地的な状況でないことは言えそうである。当時の生活様式，あるいは，自然環境の一端が遺されているのだろうが，その内容にはいまだに踏み込めない。

11層以下は部分的な深掘のみの調査だったが，縄文時代後期以前の堆積層は，その上限が不明のままである。さらに，深くに遺物包含層が存在する可能性があり，今回も果たせなかったが，深度を重視した確認調査も今後の課題に残された。　（石坂）

3　試掘調査

今年度は岡山大学構内において，３件の試掘調査を行った（表１）。いずれも津島地区におけるものである。

①の大学院自然科学研究科　合併処理槽は津島北地区の西端部，②の学生合宿所予定地は津島南地区の東端にあたり，学内ではこれまで，調査資料がない地域であったため，両調査では非常に有効な資料を得ることができた。また，③の図書館予定地の調査では，その上面が標高2.2m前後というやや低い位置での黒色土（縄文時代晩期～弥生時代前期）の分布状況および遺構のあり方などの一端を知ることができた。

①　大学院自然科学研究科　合併処理槽建設予定地（津島北地区 AZ17区）

調査の経過

既設の文・法・経済学部合併処理槽に隣接して大学院自然科学研究科棟の合併処理槽の新営工事が計画されたのに伴い，遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施した。工事計画によると，建設に伴う掘削深度は現地表下５ｍに及ぶことになっていた。また，付近のボーリング調査では現地表下１～5.5ｍまで粘土層の累層が存在し，以下砂礫層が堆積することが確認されており，昨今の構内遺跡の発掘成果を考慮すれば，砂礫層に近い深さの粘土層でも遺構の存在する可能性が充分に考えられた。そこで，本試掘調査も現地表下４～５ｍまでをその調査対象とすることとした。

調査方法は調査深度と調査区の強度を考慮して階段掘りを採用した。まず，既設合併処理槽の西側に東西９ｍ，南北10ｍの調査区を設定し（図８），造成土部分を機械によって除去した。この段階で改めて東西4.5ｍ，南北４ｍの発掘区を設定し，以下，0.7～0.8ｍ掘り下げるごとに幅0.5～１ｍのテラスを設けて，側壁を階段状に残しながら，現地表下約４ｍの砂層上面まで分層発掘を行なった。調査期間は1989年８月23日～９月９日である。

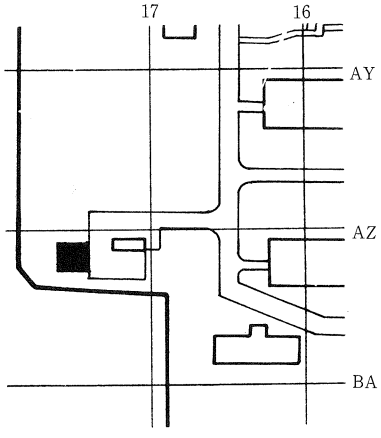


図８　調査地点図　（縮尺１/2500）

層　序（図９）

調査地の標高は，4.6ｍであり，造成土（１層）が1.6～２ｍほど堆積している。２～３層は明治の水田層である。４～９層は近世から中世末の水田層であり，酸化鉄の雲状斑紋とマンガンの点状斑紋が認められる。10～11層は中世の水田層で，酸化鉄の

管状斑紋とマンガンの点状斑紋が認められる。これらの層の層界はかなり明瞭である。12～16層は灰色の強い粘土層であり，17層は腐植質を含む黒色がかった粘土層である。18層は灰色粘土層であるが，この層になるとマンガン・酸化鉄等の斑紋は認められなくなる。19層は流木を含む砂層であり，湧水が著しい。

遺構・遺物

確認された遺構はすべて中世～明治の水田関連のものである。

溝１は明治水田層上面から掘り込まれている。畦畔１・２は近世から中世末のものである。畦畔３は中世（13世紀）のもので，11層上面を削り出して造られている。これら溝・畦畔は南北方向にほぼ同じ位置に造られており，中世～明治の水田区画において重要な意味をもっていたようだ。

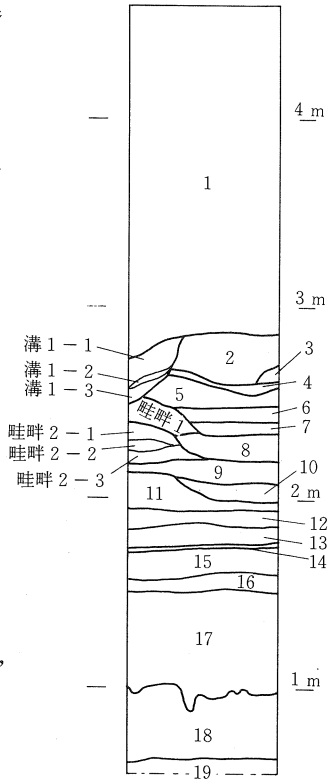
遺物は，10層～11層上面より中世土器（土師質土器・青磁等）片が出土し，ほぼ13世紀頃に比定することができる。

11層中より須恵器片が，17層上部より弥生土器片が出土しているが，いずれも小片である。量的にみて，中世の土師質土器が約20点ともっとも多く，他は１～２点程度である。

まとめ

本調査区周辺が確実に水田化されるのは中世以降のことであり，それ以前は堆積層の状況から推測してみても，おそらく長期間低湿地のような状態にあったものと考えられる。

（絹川・安井）



1　造成土
2　灰色(10Y 5/1)シルト
3　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト
4　灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト
5　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト
6　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト
7　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト
8　暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト
9　灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト
10　灰オリーブ色(5Y 6/2)シルト
11　暗灰黄色(2.5Y 4/2)砂含粘土
12　暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)砂含粘土
13　暗灰黄色(2.5Y 4/2)砂含粘土
14　黄灰色(2.5Y 4/1)砂含粘土
15　暗灰黄色(2.5Y 4/2)砂含粘土
16　暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)砂含粘土
17　オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土
18　灰色(10Y 4/1)粘土
19　暗褐灰色(7.5GY 4/1)砂

溝１：1　灰オリーブ色(5Y 6/2)砂質土
　　2　オリーブ黄色(5Y 6/3)粘質土
　　3　灰色(10Y 5/1)シルト
畦畔１：灰オリーブ色(5Y 5/2)粘質土
畦畔２：1　灰色(7.5Y 5/1)粘質土
　　2　灰色(5Y 6/1)砂質土
　　3　灰オリーブ色(5Y 5/2)粘質土
畦畔３：⇨11層

図９　土層柱状図　（縮尺1/40）

② 学生合宿所新営予定地（津島南地区 BD02区）

調査に至る経過

岡山市津島東四丁目の市道本町津島東線の幅員拡幅に伴い，拡幅部分に取り込まれる学生合宿所を解体・撤去する必要が生じたため，岡山市による補償措置として，新たな合宿所が建設されることになった。建設計画によれば，建物はプレハブ造，基礎構築に伴う掘削が造成土内でおさまるものであったが，建物はかなり長期間の使用が予定されていた。当センターは，その建設が埋蔵文化財に破壊的影響を与えないと予想されても，建造物が一定の面積を長期にわたって占有する場合には，該地点の埋蔵文化財の状況を確認する必要があると判断し，今回，小規模な試掘を以て対応することを方針とした。協議の結果，原因者である岡山市が作業員と機械を用意し，当センターが調査員を派遣して，調査を実施することとなった。

調査の方法と経過（図10）

調査地点は岡山大学津島南地区の東端，サッカー場の南側に位置する。調査期間は1989年９月18日～９月26日である。建物建設予定地内に一ヶ所，３×３ｍの範囲で試掘抗を設定した。厚さ約１ｍの造成土は機械で除去し，それ以下は人力で分層発掘を行なった。全面的発掘は現地表（標高5.1ｍ）下２ｍの14層上面で停止し，それ以下については，試掘抗北・西壁沿いに深掘して，土層観察を行なうに止めた。最大掘下げ深度は地表下約3.2ｍである。

層　序（図10）

１層は1907年の陸軍屯営地建設に伴う造成土である。２層は造成直前の近代耕作土で，その上面に南北に走る畝状遺構が認められた。３～13層は，灰色～灰褐色系粘質土の水平な堆積で，酸化鉄とマンガンの集積をみる。水田耕作土の累積層と思われるが，実際に水田遺構を検出したのは13層上面においてであった。遺物に乏しく，各層の厳密な時期比定は難しいが，およそ，

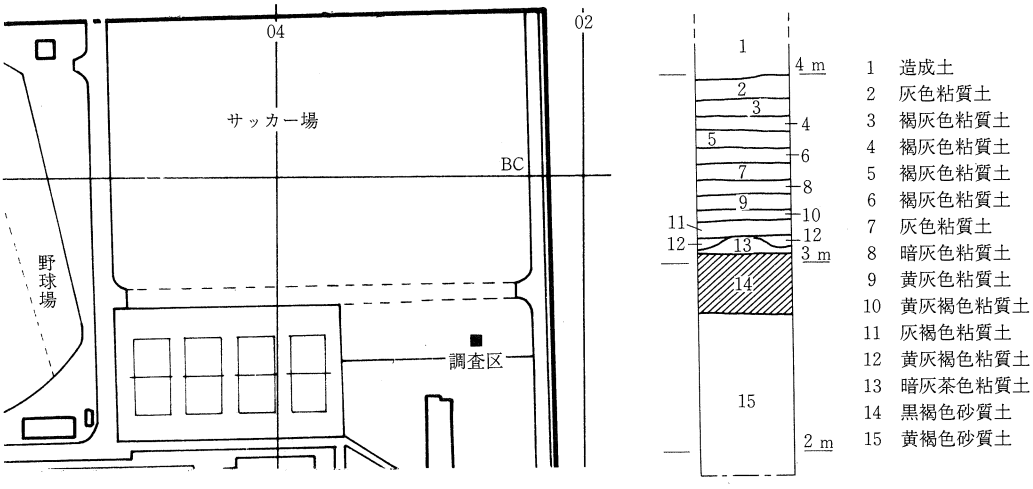


図10　調査地点図・土層柱状図　（縮尺１/2500・１/40）

3～5層は近世～中世，6・7層は中世，8層は古代に属すると考えている。9層以下については，出土遺物が皆無のため，帰属時期を決定する材料を欠く。これまでの調査，特に，本試掘抗に近接する津島江道遺跡（岡北中学校）の調査結果[註]と対比すれば，9層が弥生時代後期，10～12層が弥生中期～前期に相当するのではないかと思われる。14層は，弥生前期以前に形成され，津島地区一円に分布する黒色土に対応する層である。15層の黄褐色砂質土は，微高地の基盤をなす層として，これも津島地区で広く認められており，現在のところ，縄文時代後期以前の堆積と推定される。

土層の堆積はほとんど水平であるが，14層以下は，試掘抗北端と南端とで若干の高低差が認められ，本地点における弥生前期以前の旧地形は，南から北へ向って僅かながら下降していたと思われる。

遺構・遺物（図11）

3層以下13層まで，水田土壌と考えられたため，その関連遺構の検出を主眼として精査を繰り返したが，12層までは，遺構は認められなかった。

12層を除去した13層上面で水田遺構を検出した。畦畔は，現状で幅30cm，高さ3cmを測り，東北から南西方向に走る。この水田遺構は，前述したように遺物皆無のため，造営時期を決定し難い。津島江道遺跡で「突帯文期水田」と認識された水田に，その在り方，土壌の性状等近似するものの，確実な根拠に欠ける。ここでは，突帯文期から弥生前期の時間幅のなかで捉えておきたい。

遺物は3層から8層の各層で出土している，すべて土器の小片で，器種・時期が判明するものは少ない。6層から土師質高台付椀，7層より土師質椀・小皿，須恵質椀，8層より土師器甕，須恵器片が出土している。

まとめ

本地点は，微高地の南から北へ下る緩斜面にあたり，恐らく弥生前期時代以来連綿と水田耕作が為されてきたと思われる。試掘抗内では一面を検出したのみであったが，各時期の水田が良好な形で遺存している可能性は高い。また，今回は確認しなかったが，弥生時代遺構の下に縄文時代後期から晩期の遺構が，存在する可能性も考えられる。

（若林）

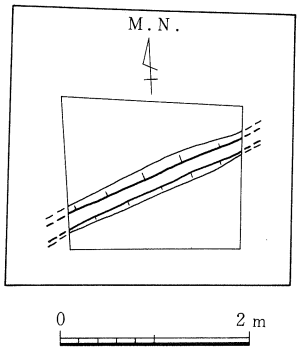


図11　13層上面畦畔平面図
（縮尺1/80）

註　岡山市教育委員会「津島江道遺跡」『シンポジューム日本における稲作農耕の起源と展開　資料集』97～100頁　日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会　1988

③　附属図書館新営予定地（津島北地区AV・AW13区）

調査の経過

附属図書館改築計画に伴い，埋蔵文化財の確認のため，第１次工事予定地部分について試掘調査を実施した。西に隣接する，排水基幹整備工事NP1地点では，弥生時代中期の大溝(SD2)と平安時代前半の溝(SD1)が確認されており(註)，それと関連した遺構の検出が期待された。予定地内の北東端にTP1(11m×11m)，南端中央にTP2(4m×5m)を設定した(図12)。TP1は，低地部に位置すると推定されたので，深掘するために階段状に発掘したが，調査途中で低地部ではないことがわかり，予定を変更し，通常の調査深度で終了した。TP2は，他の試掘調査と同様の方法で行なった。期間は1990年２月20日から３月14日までで，調査員２名が担当した。

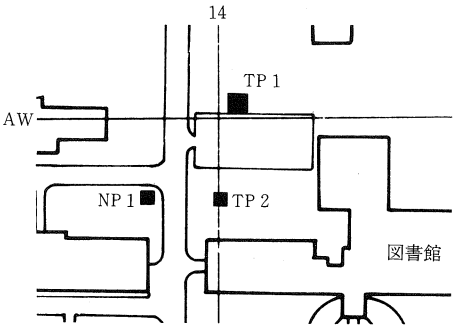


図12　調査地点図　(縮尺１/2400)

層　序（図13）

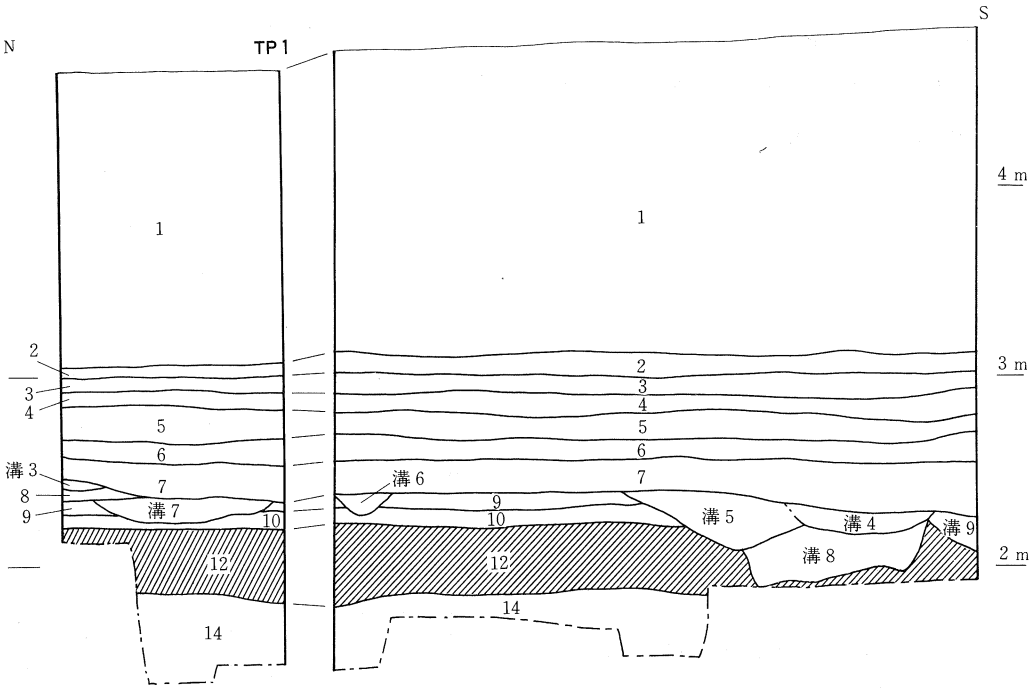
現地表は標高4.6～4.8mを測る。１層は造成土で，２層はその直下の近代耕作土である。出土遺物等から，３～４層は近世，５層は中世と考えられる。６～７層は，いずれも遺物が細片で量も少ないため詳細は不明だが，おおまかに，６層は古代～中世の洪水砂，７層は古代の耕作土と捉えている。８層は溝中の土器から古墳時代後半と見られる。９～11層は時期が決定できる出土遺物はないが，層の堆積状況や他地点との比較から，だいたい弥生時代と推定される。12層は構内の各地点で弥生時代前期ごろの水田が検出されている層である。13層は今回の調査では遺物は出土していないが，縄文時代後期の包含層の可能性が高い。14層は無遺物層と思われるが，上面で小穴群が検出される可能性もある。

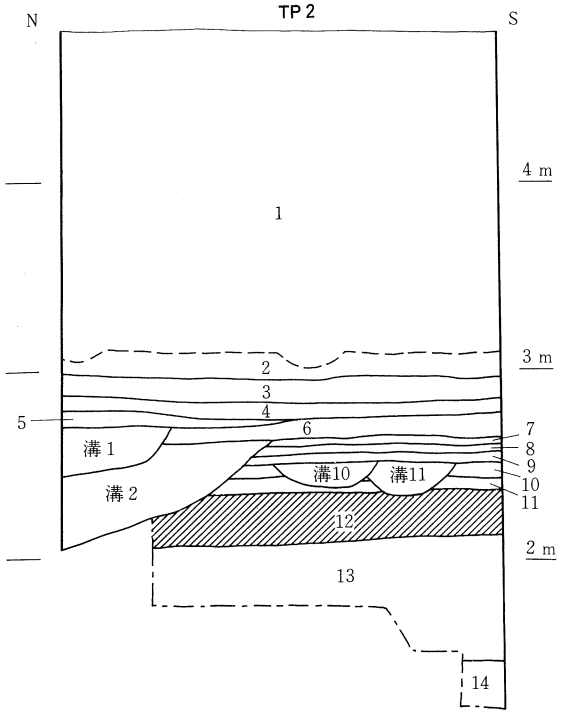
遺　構（図14）

津島地区の他地点と同様，各層で水田跡の検出に努めたが，畦畔が確認できたのは７層上面のみであった。TP1では，南北２条，東西１条の畦畔を，TP2では，溝の脇の東西の畦畔１条をそれぞれ検出した。水田関連と思われる溝は計11本確認した。すべておおよそ東西方向に掘られていた。出土遺物と掘りこんだ層の時期から，溝１は古代～中世，溝２は古代，溝３・４・５は古墳時代後期，溝10・11は弥生時代と推測している。溝６～９は時期不明である。なお，溝２はNP1地点SD1に対応すると考えている。その他の遺構は検出されなかった。

遺　物(図15)

合わせてコンテナ(28ℓ)１杯分の遺物が出土したが，細片が多く図化できるものはごくわずかであった。以下，図15に示した遺物について説明する。１は溝３から出土した。溝３には，





1　造成土
2　青灰褐色粘質土（明治）
3　黄灰褐色砂質土（近世）
4　暗黄灰褐色土　（〃）
5　灰褐色粘質土（中世）
6　淡灰褐色砂質土
7　暗～淡灰褐色粘質土（古代？）
8　暗灰褐色粘土質（古墳後期）
9　黄灰褐色砂質土
10　黒灰色粘質土
11　暗灰褐色粘土
12　黒褐色粘質土（縄文晩期～弥生前期？）
13　黄褐色粘質土
14　黄灰色～暗青灰色粘質土

溝1　灰褐色細砂
溝2　明灰褐色細砂～粗砂
溝3　淡黄灰褐色細砂
溝4　淡灰褐色砂質土
溝5　淡灰褐色砂質土
溝6　淡灰褐色砂質土
溝7　淡灰褐色砂質土
溝8　淡黄灰褐色細砂～粗砂
溝9　淡灰褐色砂質土
溝10　黄灰褐色砂質土
溝11　黄灰褐色砂質土

図13　土層断面図　（縮尺 1 /40）

ほかにも十数点土器片があったが，明確に時期を判定できるはこれのみだった。2～6は5層出土である。TP1，5層では，他の層に比べて多くの土器が出土している。7～12は3・4層から出土した。いずれも摩耗が著しく，耕作による攪拌をうけていると思われる。

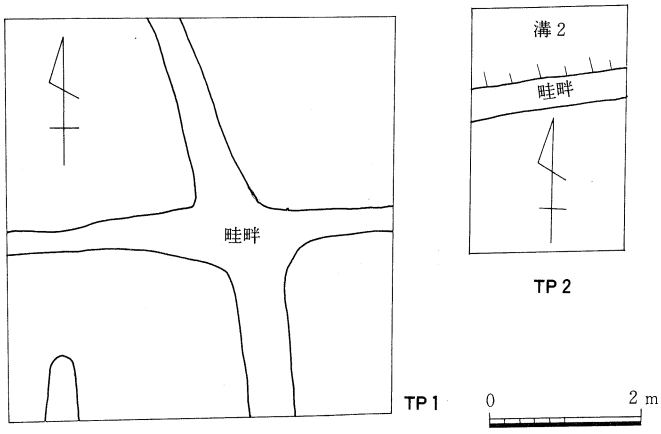
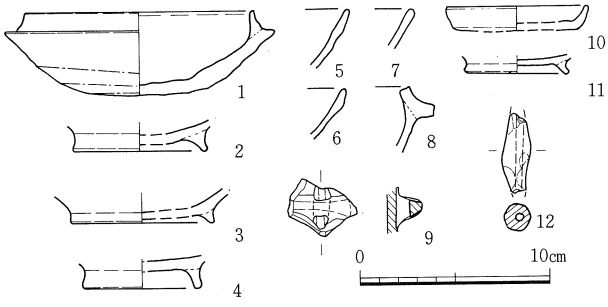


図14　7層上面遺構検出状況　（縮尺1/100）

今回の調査では，溝が多く確認され，各層での水田検出の可能性が高いことがわかった。特に，NP1地点SD1に対応すると考えられる溝2が検出されたのは，条里に関連して重要である。一方，SD2の続きを確認することはできなった。しかし，発掘調査の際には，調査区内に存在すると仮定して計画をたてる必要がある。その場合，低地部が調査区中央に入りこんでいることになり，縄文時代の遺構の存在に留意しなければならないだろう。　（土井）



番号	器種	出土地点・層位	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	須恵器 杯身	TP1，溝3	底部外面ヘラケズリ，ロクロ回転右回り	青灰色	細砂～微砂多
2	土師質 椀	〃，5層	内外面ヨコナデ，摩滅で詳細不明，二次焼成痕	黄白色	微砂僅か，精良
3	〃　〃	〃　〃	〃　〃	乳白色	〃　〃
4	〃　〃	〃　〃	〃　〃	〃	〃　〃
5	土師器 杯	〃　〃	〃　〃，堅緻	明赤色	〃　〃
6	〃　〃	〃　〃	〃　〃，二次焼成痕	明赤色～淡黒褐色	〃　〃
7	土師質 椀	〃，3･4層	〃　〃　〃	淡暗褐色～黒褐色	細砂～微砂多
8	〃　鍋	〃　〃	〃　〃，煤付着	黒褐色～淡黒褐色	〃
9	〃　〃	〃　〃	内面横方向ハケ目，〃，外面煤付着	(外)黒褐色(内)淡橙色	〃
10	〃　椀	TP2，〃	内外面ヨコナデ，〃	黄灰褐色(底外)灰白色	微砂僅か，精良
11	土師質 皿	〃　〃	〃　〃	黄褐色	〃
12	土　錘	〃　〃	押圧	明赤褐色	細砂～微砂多

図15　出土遺物　（縮尺1/4）

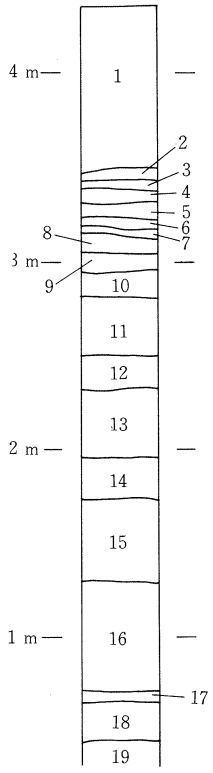
註　『岡山大学津島北地区 小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査』　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集　1985　岡山大学埋蔵文化財調査室

4　立会調査

(1)　津島地区

1989年度の津島地区における立会調査は，事業別にみると総計26件である。詳細にみれば35件に及ぶ。しかしながら，そのほとんどは造成土内で終了するか，掘削深度が大きいものであっても面積的にはごく僅少なものであった。したがって以下に報告する３件の立会調査を除いては特に記すべきところはない。

1989年度の立会調査において内容・規模的に大きなものは，大学院自然科学研究科棟新営工事用道路設置工事（表１－⑧）・工学部情報工学科棟新営に伴う地下部分掘削工事（表１－⑫）・大学院自然科学研究科合併処理槽新営工事（表１－㉓）の３件であった。うち合併処理槽新営工事はすでに試掘調査が行なわれており，立会調査においても，試掘調査時と同様の所見をえることができた。自然科学研究科棟新営工事用道路設置工事では，約75m²が調査対象となり，４月19・20日の２日間で実質的な発掘調査を行い，その結果，近世以降の溝１本，弥生時代後期の水田畦畔を検出した。詳細な報告は本報告に委ねたい。情報工学科棟新営に伴う地下部分掘削工事は地表下６ｍまで機械掘削を行なうところから地層の堆積状況と包含層の有無を確認するために，土層観察を主とした調査を行なった。その結果，既発掘層以外の包含層を発見するには至らなかったものの，標高－0.5ｍまでの土層堆積状況を詳細に観察することができた（図16）。



1　造成土
2　灰色粘質土
3　茶褐色砂質土
4　茶灰色　〃
5　黄灰色　〃
6　暗黄灰色砂質土
7　暗灰色砂質土
8　黄灰色　〃
9　〃　粘質土
10　茶褐色　〃
11　黒褐色　〃
12　暗茶褐色粘質土
13　明黄褐色粘質土
14　黄灰色粘質土
15　黄茶褐色粘質土
16　青灰色粘質土
17　〃　粘土
18　暗茶灰色粘質土
19　粗砂

図16　立会調査⑫
土層柱状図
（縮尺１/40）

以上のように，今年度の津島地区における立会調査は，全体的に工事規模が小さいながらも，近年に比較して件数が多かったことが窺える。うち３件は工事面積・掘削深度ともに大規模なものであったが，いずれもその規模に対応した調査体制をとることができた。特に情報工学科棟地下部分掘削工事では，これまでボーリング調査でしか確認できなかった津島地区の沖積層下部の観察を行なうことができた。今後は既発掘調査地部分の深掘等でも充分な体制で臨む必要があろうと思われる。

（絹川）

(2) 鹿田地区

鹿田地区では事業別に見ると４件，詳細には11件の立会調査が実施された。造成土下に及んだものは２件（表１－㊶・㊻）である。ただし，調査㊶は造成土直下の近代水田土層に達したに止まったため，ここでは調査㊻についてのみ報告したい。

医学部附属病院管理棟跡地環境整備工事に伴う調査のうち，外灯基礎工事部分に対する調査では，管理棟跡地縁辺部に開けられた深さ1.2～1.5mの坑７ヶ所を調査した。２ヶ所は既設施設の攪乱内であったが，残り５ヶ所で近代水田層より下位の土層が観察された。層序は一様で，近代水田土の下に黄灰褐色粘質土，さらに灰褐色粘質土が続く。前者は近世の，後者は中世の包含層に相当する可能性が強い。層の上面レベルは５ヶ所間で大きな差は認められず，管理棟跡地における中世以降の地形は単調で，安定した平坦地を為していたと思われる。ただ，1984年度に実施した西病棟北側受水槽予定地の試掘調査結果[註]を併せて考えてみると，総じて，単調ながら北西から南東へ僅かに下降する傾向が窺えるようである。（若林）

註　『岡山大学構内遺跡調査研究年報』２　1985　岡山大学埋蔵文化財調査室

5　その他の活動

(1) 半田山城跡の平板測量

本センターでは従来から，津島キャンパスの北にある，旧半田山演習林内の半田山城跡の測量を計画していた。一方，1986年以来，「岡山大学教育研究学内特別経費」による「都市近郊林（半田山）の自然特性およびその環境保全機能に関する研究」が全学的に実施されており，文学部考古学研究室でも継続して考古学的特性に関する研究をおこなってきた。本年度は，そうした研究の一環として，半田山城跡の測量調査を，文学部新納泉助教授を代表として実施することになり，本センターが全面的に協力することになった。

半田山城は，半田山山塊の西寄り山頂に位置する連郭式山城である。現在は，段状の郭の跡や竪堀が認められるのみで，城主等については「林玄蕃」という名前が伝えられているにすぎない。年代については，「平安期後半から戦国期前半」と推定されている。

測量にあたっては，岡山大学農学部附属農場の許可を得て，雑木を伐採したうえ，必要個所に杭を打った。測量には石坂俊郎が中心となってあたり，本センター職員が協力した。

測量は1990年１月下旬から３月下旬にかけて実施した。調査の結果，本山城は半田山山塊の西寄り山頂，標高134ｍに位置する，東西長約140ｍ・南北幅70ｍ以上の連郭式山城で，北斜面に２条，南斜面に１条の竪堀が確認された。詳細は本年報の附編に報告している。（新納）

(2) 分布調査

岡山大学は，津島・鹿田の両キャンパスの他，岡山・香川・鳥取各県に附属施設を有している。それら各施設地内および周辺の埋蔵文化財の有無を把握すべく，今年度も２ヶ所で表面観察による遺跡分布調査を実施した。

① 地球内部研究センター・医学部附属病院三朝分院（三朝団地）

鳥取県東伯郡三朝町山田827に所在する。三朝温泉街の西方，標高約50ｍの平坦地に立地し，背後の尾根の一部を敷地に含んでいる。

なお，三朝町教育委員会によって遺跡分布調査が行われており，既に成果が公表されている。(註1)

調査は1989年５月18・19日に実施したが，敷地内では遺跡は確認されなかった。周辺調査として背後の尾根を縦走したところ，古墳４基・城砦と思われる遺構１ヶ所が発見された。いずれも尾根稜線上に立地する（図17）。

１～４は古墳である。１は径11～13ｍ，高1.5ｍ，円墳。２は径９ｍ，円墳，石材が露出している。３は径12ｍ，高1.8ｍ，円墳。４は径11.5ｍ，円墳。５は城跡と見られる。台状の高まりの周辺に平坦なテラス数段，溝が付設されている。標高約190ｍ。北方2.3kmに所在する羽衣石城との関連が注意される。遺物はいずれにおいても採集されなかった。

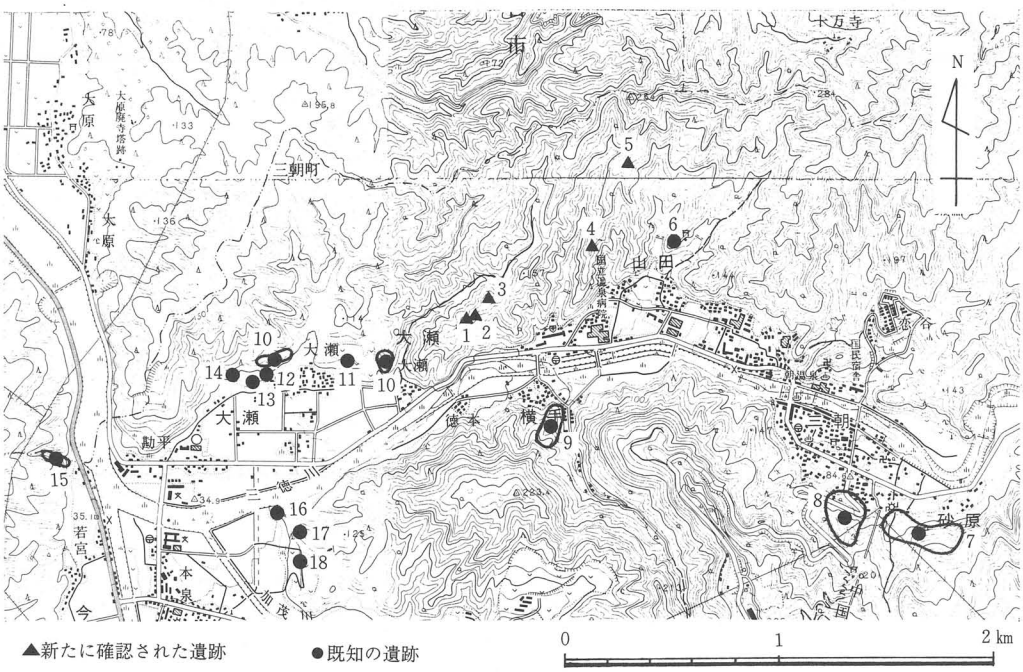


図17　三朝団地周辺遺跡分布図　（縮尺１/35000）

１　古墳，２　古墳，３　古墳，４　古墳，５　城砦，６　山田１号墳，７　砂原古墳群，８　三朝古墳群，９　横手古墳群，10　大瀬古墳群，11　長光寺遺跡，12　間狭平第３遺跡，13　間狭平第２遺跡，14　間狭平第１遺跡，15　若宮古墳群，16　本泉１号墳，17　本泉10号墳，18　丸山遺跡

② 医学部附属病院本島分室・岡山農場研究施設本島分場（本島団地）

香川県丸亀市本島泊494に所在する。1989年５月24日～26日に調査を実施した。1988年の分布調査では既に農場内に遺物の散布を確認しており[註2]，今回は島内で新たに遺物散布地２ヶ所，古墳３基を確認した（図18）。採集された遺物は土器・陶磁器細片で，確実に弥生時代以前に遡るものはない。古墳は本島港の東に突き出た半島状の丘陵上に立地し，稜線の南方延長上に讃岐富士を望むことができる。山王権現社殿をとりまくように３基が確認され，いずれも径７～８ｍの円墳と思われる。うち１基には石材が露出している。遺物は採集されなかった。（石坂）

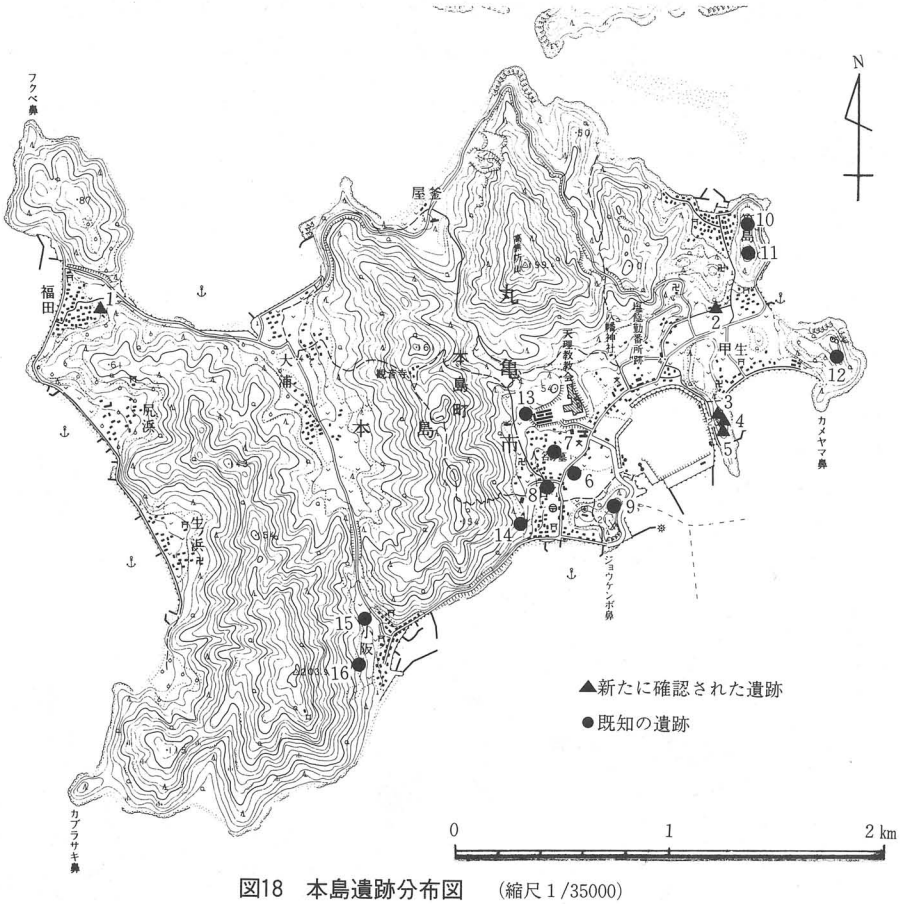


図18　本島遺跡分布図　（縮尺１/35000）

1　散布地，2　散布地，3　古墳，4　古墳，5　古墳，6　散布地，7　散布地，
8　散布地，9　本島団地内散布地，10　笠島東山古墳，11　笠島城跡，12　亀山古墳，
13　旗坂経塚，14　寺田経塚，15　小坂１号墳，16　小坂２号墳

註１　「付章　三朝町の遺跡」『丸山遺跡発掘調査報告書』1984 三朝町教育委員会・花園大学考古学研究室
註２　『岡山大学構内遺跡調査研究年報』５　1988　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第3章　1989年度普及・研究・資料整理活動

1　資料整理

本年度は次の6件の発掘調査の資料整理を行った。

① 鹿田遺跡（Ⅲ・Ⅳ次調査：医療技術短期大学部校舎新営に伴う発掘調査）

a　Ⅲ次調査（本体工事及び南北共同構部分）：遺構のトレース，写真撮影，報告書作成

b　Ⅳ次調査（配管工事部分）：遺構のトレース，写真撮影，報告書作成

② 津島地区遺跡群（学生部男子学生寮新営に伴う発掘調査）

出土遺物の実測・トレース

③ 鹿田遺跡（Ⅴ次調査：医学部附属病院管理棟新営に伴う発掘調査）

出土遺物の一部復元，出土種子類の選別

④ 津島地区遺跡群（大学院自然科学研究科棟新営に伴う発掘調査）

出土遺物の洗浄・一部復元，図面整理

⑤ 津島地区遺跡群（工学部生物応用工学科棟新営に伴う発掘調査）

出土遺物の洗浄，出土種子類の洗浄・選別，図面整理

⑥ 津島地区遺跡群（工学部情報工学科棟新営に伴う発掘調査）

出土遺物の復元・実測・トレース，図面整理

2　分析依頼

① 縄文時代炉跡の熱残留磁気測定…島根大学理学部教授　時枝克安

工学部情報工学科棟予定地の発掘調査

② 出土種子同定…大阪市立大学理学部教授　粉川昭平

鹿田遺跡（Ⅲ～Ⅴ次調査）：古代末～中世の井戸内出土種子

〈津島地区遺跡群〉

男子学生寮予定地の調査：縄文時代晩期貯蔵穴内出土種子・縄文時代後期層出土種子
古代溝内出土種子

大学院自然科学研究科棟予定地の調査：縄文時代後期貯蔵穴内出土種子

工学部生物応用工学科棟予定地の調査：古代溝内出土種子

③ 出土人骨の歯の鑑定…岡山大学歯学部教授　小田嶋梧郎

鹿田遺跡（Ⅴ次調査）：中世初頭の埋葬人骨

④ 灰像分析・炭化麦の同定…東京大学総合研究資料館　松谷暁子

鹿田遺跡（Ⅲ次調査）：古代末井戸内出土炭化麦の同定

（Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ次調査）：住居址中央穴内炭化物・井戸内炭化物等の灰像分析

津島地区（工学部情報工学科棟予定地）：縄文時代炉跡内炭化物の灰像分析

⑤ 木製品樹種同定…農林水産省森林総合研究所　能城修一

鹿田遺跡（Ⅲ・Ⅴ次調査）：古代末井戸内出土木製品・古代河道内出土杭群他

⑥ 動物遺体の分析…奈良文化財研究所埋蔵文化財センター　松井章

鹿田遺跡（Ⅳ次調査）：古代河道内遺物

⑦ 石材同定…岡山大学理学部助手　鈴木茂之

鹿田遺跡（Ⅲ・Ⅳ次調査）：包含層出土石器

⑧ 花粉分析…岡山理科大学教授　三好教夫

津島地区（工学部生物応用工学科棟予定地）：縄文～近世土壌

3　刊行物

① 『鹿田遺跡Ⅱ』　岡山大学構内遺跡発掘調査報告書　第４冊　1990年３月31日発行

② 岡山大学構内遺跡調査研究年報６　1989年度　1989年10月14日発行

③ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第２号　1989年８月　発行

〃　第３号　1990年２月　発行

※なお,1989年度までの刊行物については附表３・４で一覧にして挙げている。

4　調査員の活動

(1) 資料収集活動

絹川一徳

＜旧石器・縄文時代の石器を中心に＞

熊本県教育委員会・宮崎県教育委員会・大分県教育委員会

考古学研究会総会参加，日本考古学協会総会参加

第13回近畿旧石器交流会参加，第６回中・四国旧石器文化談話会参加

土井基司

＜三河地方の横穴式石室について＞

豊田市郷土資料館・田原市教育委員会他

＜山陰地方の古墳時代を中心に＞

八雲立つ風土記の丘・玉造資料館・鳥取県立博物館他

＜大学構内遺跡調査の実態について＞

山口大学埋蔵文化財資料館

考古学研究会総会参加，第６回日本文化財科学研究会参加

古代学協会四国支部大会参加，第26・27回埋蔵文化財研究集会参加

中世土器研究会参加，九州史学会参加

山本悦世

＜木製品の科学的保存処理法について＞

元興寺文化財研究所

＜縄文時代低湿地遺跡の資料について＞

若狭歴史民俗資料館他

＜弥生時代ガラス製造関連遺跡について＞

山口県埋蔵文化財センター

考古学研究会総会参加，第６回日本文化財科学研究会参加

古代学協会四国支部大会参加，中世土器研究会参加

若林　卓

考古学研究会総会参加，古代学協会四国支部大会参加

第27回埋蔵文化財研究集会参加

(2)　資料報告他

絹川一徳

「徳島県土柱周辺の旧石器」　旧石器考古学39号　1989

「瀬戸内におけるサヌカイト旧石器製作」　考古学ジャーナル315号　1990

土井基司

「竪穴系横口式石室小考」　岡山大学構内遺跡調査研究年報　6　1989

(3)　研究発表

土井基司

考古学研究会３月例会　「横穴式石室の伝播について」

5　日誌抄

4月1日　高重進センター長就任
4月7日　第1回月例職員会議
・今年度活動計画案他
4月19日　運営委員会開催
5月12日　第2回月例職員会議
・展示会について　・運営委員会報告
・増設収蔵庫設計案について　他
5月16日　運営委員会開催
5月16日　調査研究室長交替（山本から新納へ）
5月18～19日　三朝地区分布調査（担当：石坂・若林）
5月20日　工学部生物応用工学科棟予定地発掘調査の現地説明会開催
5月24～26日　本島分布調査（担当：石坂・安井）
5月24日　管理委員会開催
5月31日　工学部生物応用工学科棟の発掘調査終了
6月7日　第3回月例職員会議
・各調査報告　・展示会について　他
7月5日　第4回月例職員会議
・展示会について　他
8月2日　第5回月例職員会議
・調査計画について（大学院自然科学研究科合併処理槽・教育学部身体障害者用エレベーター・合宿所）
・展示会について　他
8月5日　岡山県主催の遺跡報告会に参加
8月21日　センター報第2号発行
8月23日～9月9日　大学院自然科学研究科合併処理槽予定地試掘調査（担当：絹川・安井）
9月6日　第6回月例職員会議
・調査報告　・展示会について
・半田山城の測量調査について　他
9月18～25日　合宿所試掘調査（担当：若林・安井）
9月26日　運営委員会開催
9月28日　近藤義郎氏より書架寄贈
10月5日　第7回月例職員会議
・展示会について　・運営委員会報告
・半田山城測量調査について　他
10月14日　年報6発行
10月27日　土器焼き
11月1日　第8回月例職員会議
・展示会について　他
11月16～18日　展示会開催
11月18日　展示会記念講演会（講師：近藤義郎氏）
11月25日　野外考古学体験教室開催
11月27日～12月13日　教育学部身体障害者用エレベーター予定地発掘調査（担当：石坂）
12月6日　第9回月例職員会議
・半田山城測量計画について
・展示会のまとめ
・増設収蔵庫について　他
12月28日　竹内・中塚・福田・前原・佐々木退職
12月31日　安井退職
1990年
1月4日　仕事始め
1月9日　第10回月例職員会議
・調査報告　・図書館試掘調査について
・半田山城測量計画について
・臨時職員（パート）雇用について　他
1月16日　恩藤富子・仲野照子・萩野早苗勤務開始
1月22日　大橋かおり勤務開始
1月24日～2月9日　半田山城関係伐採，測量用レベル移動・杭打ち
2月7日　第11回月例職員会議
・今年度の残り予算について
・来年度活動計画・予算について　他
2月20日～3月14日　図書館試掘調査（担当：土井・若林）
3月7日　第12回月例職員会議
・調査報告
・大学院自然科学研究科検水桝と共同溝部分調査について　他
3月8日　センター報第3号発行
3月9日　運営委員会開催
3月12～21日　半田山城測量調査
3月31日　『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第4冊　発行
収蔵庫増設部分完成
石坂・藤原退職

6　1989年度までの遺物収蔵量および保管施設

(1)　遺物収蔵量（表２）

1990年３月31日における本センターの遺物収蔵量は，鹿田遺跡　Ⅰ・Ⅱ次調査（医学部附属病院外来診療棟・NMR-CT室）：724箱，同遺跡　Ⅲ・Ⅳ次調査（医療技術短期大学部校舎他）：134箱，同遺跡　Ⅴ次調査（医学部附属病院管理棟）：119箱，農学部合併処理槽・排水管埋設予定地：18箱，学生部男子学生寮予定地：48箱，大学院自然科学研究科棟予定地：88箱，工学部情報工学科棟予定地：13箱，同学部生物応用工学科棟予定地：63箱，教育学部身体障害者用エレベーター予定地：0.3箱，試掘・立会調査（分布調査含む）：14.8箱，総計1222.1箱を数える。詳細は表２に挙げた。１箱の容量は約30ℓを目安としている。また，木器の中で大型水槽に保管のものについては１箱に換算して計算している。

(2)　管理・保管施設

本年度の本センターの使用施設としては，津島地区に管理施設（面積は100㎡）と，収蔵施設（延面積は150㎡：１・２階各75㎡）とがある。また，鹿田地区では連絡所として，旧混合病棟の東にある旧管理棟の二階の一室（約25㎡）があり，ここには，原則として，職員１名が交代で常勤する形をとり，鹿田地区の立会調査等に対応した。

収蔵施設は，主として，１階を遺物等の保管室，２階を遺物整理室にあてていたが，到底納まりきらない状態であった。そのため，1989年度末には，予定通り残り150㎡の収蔵スペースが，既設の収蔵施設の西側に取り付いて増築された。この増設部分の２階は３室に区切って，常設展示室（約18㎡）・写真撮影室（約10㎡）・整理室（約42㎡）に使用している。１階（75㎡）は遺物保管ならびに器材置き場として利用している。

今年度は実質的には昨年度と同じ施設で変化はなかったが，年度末に，津島地区で収蔵施設の増築が完成したことから，使用総面積は管理施設100㎡・収蔵施設300㎡，鹿田地区で約25㎡，合計425㎡となった。　（山本）

表２　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（1）

所属	種類	地区 調査名称	箱数（1箱：約30ℓ） 総数	土器	石器	木器	その他	サンプル	備考 主要時期・特殊遺物	文献
医病	発掘	鹿田　Ⅰ次調査 (外来診療棟)	608	491	6	60	1 ガラス 鉄器 銅鏃 他	50	弥生中期～中・近世 短甲状・櫂状木器等	⑦
〃	〃	鹿田　Ⅱ次調査 (NMR-CT室)	116	90	3	20		3	弥生後期～中世 田舟・木簡等	〃
医短	〃	鹿田　Ⅲ次調査	131	36		90		5	古代～中世，石帯	⑩
〃	〃	〃　Ⅳ次調査	3	2				1	古代，鹿角製品	〃
医病	〃	〃　Ⅴ次調査	119	79	1	20		19	弥生後期～中・近世	⑧

表2　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要 (2)

所属	種類	地区 調査名称	箱数（1箱：約30ℓ） 総数	土器	石器	木器	その他	サンプル	備考 主要時期・特殊遺物	文献
農	発掘	津島南 合併処理槽 排水管	18	7 6	1			4	縄文晩期～弥生前期	④
学	〃	津島北　男子学生寮	48	30	6	2		10	縄文後期～弥生，古代～近世 石製指輪(縄文)	⑥
大自	〃	津島北 自然科学研究科棟	88	54	2			32	縄文後期～弥生，古代～近世 耳栓・木製櫛(縄文)	⑨
工	〃	津島北 情報工学科棟	13	7	1			5	縄文後期～近世	〃
〃	〃	津島北 生物応用工学科棟	63	30	1	22		10	〃　～　〃 人形木器，アンペラ	〃 ⑪
教育	〃	津島北 エレベーター	0.3	0.3					縄文	〃
医病	試掘	鹿　田　駐車場	1	1					弥生～中世	⑤
学 教育	〃 〃	津島北　男子学生寮 〃　　研究棟	1	0.7	0.3				縄文後期～弥生前期	〃
学	〃	津島南 屋内運動場	1	1					縄文晩期～弥生前期	⑥
大自	〃	津島北 自然科学研究科棟	1	1					縄文後期～弥生前期	〃
事	〃	津　島 国際交流会館	1	1					縄文～中世	⑧
理	〃	津島北 エレベーター	0.3	0.3					中・近世	〃
教養	〃	津島南 エレベーター	0.7	0.7					縄文・中世	〃
工	〃	津島北　校舎	1	1					縄文～近世	⑨
農·薬	〃	津島南　動物実験・ 遺伝子実験施設	0.7	0.7					縄文～弥生，中・近世 石鏃・鉄器	〃
事	〃	津島南 国際交流会館	0.3	0.3					中世	〃
大自	〃	津島北　合併処理槽	0.2	0.2					中・近世	⑪
学	〃	津島南　学生合宿所	0.5	0.2				0.3	中世	〃
図	〃	津島北　図書館	0.8	0.8						〃
全学	立会	'83年度	2	2					分銅形土製品	①
〃	〃	'84年度	1	1						②
〃	〃	'85年度	1	1						⑤
〃	〃	'86年度	0.5	0.5						⑥
〃	〃	'87年度	0.5	0.5						⑧
	分布	'89年度　三朝 本島	0.3	0.3						⑪
総箱数			1222.1	846.5	21.3	214	1	139.3		

※文献番号は刊行物表の番号に対応する。文献⑪は本年報7を指す。

7　展示会

構内遺跡の発掘調査の成果について体系的に紹介するために，展示会を開催する必要性が数年来論じられてきた。しかし，大規模な発掘調査が連続して時間的に余裕がなく，また，人員等の体制も整っていなかったので，懸案事項として毎年次年度に送られてきた。本年度は発掘調査の負担が軽くなることが予想され，一昨年のセンターへの改組，昨年度の人員拡充によって，体制もかなり整ってきたので，計画を具体化して展示会の開催に向け動き始めた。8月から9月にかけて具体的企画案を練り，事務局とも予算など開催に当たっての諸々の問題を協議し，協力の快諾も得ることができた。運営委員会でも承認され，11月16日～18日に開催が決定した。マスコミ関係を通じての宣伝，周辺の町内会へのビラ配り，学内でのポスター掲示が効を奏して，当日は総計282名の見学者があった。展示会に関連して最終日には記念講演会があり，約100名が参加，1週間後には野外考古学体験教室を開催し，参加者24名，見学者約50名であった。尚，展示会関連の行事の詳細はセンター報で報告済みであり，以下概略を簡単に記す。

「岡山大学キャンパス発掘成果展」　　1989年11月16日～18日（9：00～16：30）
岡山大学津島地区学生会館2階音楽鑑賞室

＜成果展＞　埋文センターの仕事と今までの調査の概要を解説

主な展示品　耳栓(縄文後期)，指輪(縄文晩期)，人形(平安時代)…津島地区
土器棺・乳歯(弥生後期)，櫛・斎串・杓子状木器(平安時代)…鹿田地区

＜企画展＞　「縄文・弥生の食生活」

食文化に関連した遺構・遺物が多く出土しているのでそれをテーマにした。

主な展示品　縄文時代後期の貯蔵穴の模型
弥生時代の水田の出土状況の写真
弥生時代の農耕具
（木製鋤先，打製石包丁）
土錘の装着状況の模式的復元
弥生時代の製塩土器

ビデオ上映　学生会館2階北集会室
「縄文・弥生の食生活」
「弥生土器を作る」
「埋文センターの仕事」

展示会風景

＜記念講演会＞

「縄文時代と弥生時代の暮し－主に食糧生産－」

講師：近藤義郎　岡山大学文学部教授

1989年11月18日（14：00～15：30）

岡山大学津島地区　学生会館２階大会議室

＜野外考古学体験教室＞

「原始食の調理と試食」

1989年11月25日（13:00～16:30）

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター敷地内

弥生班…炊飯，魚の串焼き

縄文班…ドングリクッキー，あさり汁

製塩班…土器製塩

見学者…火起こしほか

以上の催し物の開催は，当センターの独力では到底なし得なかったものであり，多くの個人，機関の協力を得て初めて可能となった。ここに列記して感謝にかえたい。岡山県古代吉備文化財センター，ナイカイ塩業，上斎原村，津島地区周辺町内会，岡山大学事務局施設部，同学生部，岡本素六先生（岡山大学教育学部），近藤義郎先生（同文学部），稲田孝司先生（同）。この他にも多くの方々にお世話になった。残念ながら全てを挙げられないが深く感謝している。　（土井）

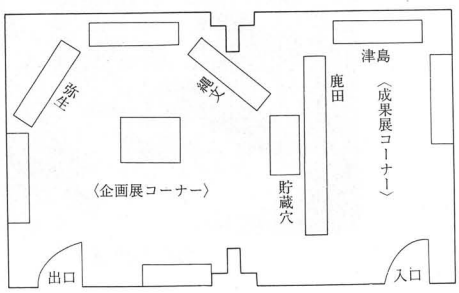
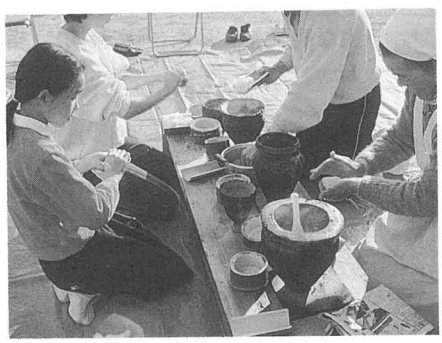


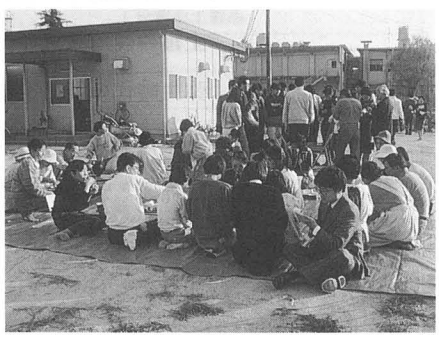
図19　展示会場見取図　（縮尺１/200）

記念講演会

野外考古学体験教室（火起こし）



同　　上（弥生班）



同　　上（試食風景）

第4章　1989年度埋蔵文化財調査研究センター活動のまとめ

本年度は，工学部生物応用工学科棟予定地の調査以外には大規模な調査がなく，埋蔵文化財調査研究センターの質的向上がはかられた年であった。

まず，医療技術短期大学予定地の調査報告書が年度末に刊行された(『鹿田遺跡Ⅱ』)。

また，かねてからの懸案だった事項のいくつかに取り組むことができた。

1つは普及・啓蒙活動の充実である。展示会及び記念講演会，野外考古学体験教室と多彩な催し物を行った。学内外における，埋蔵文化財の保護と岡山大学構内遺跡に対する理解が少しは深まったと思う。まだまだ未熟ながらもなんとか形になったのは，多くの機関，個人の協力があったからであり，ここで改めて感謝したい。センター報も年2回発行がなんとか軌道に乗った。本年度の経験を生かしてますます内容の濃いものにしていきたい。

もう1つは，構内遺跡に対する研究活動の活発化である。前年度中断した分布調査を再開し，三朝地区・本島地区を調査した。ついで，半田山旧演習林に所在する半田山城の測量調査を実施した。測量とはいえ，工事を前提とした調査以外に，当センターが構内遺跡を調査したことは画期的である。これについては附編に資料紹介をかねた論考も載せている。

以上の活発な活動と並行して，件数は少なかったが発掘調査もいくつか成果があった。前年度の調査によって生じた，深い部分での調査の問題について，勾配率を考えながら段状に掘り下げるという方法を試みた。壁面の観察等には支障がなく，発掘方法については，一応の目途がたった。しかし，期間・予算などの検討は手つかずのままだ。大規模な調査の場合は，段状の部分の面積が大きくなるので，もっと検討する必要もある。

考古学的分野のみならず，熱残留磁気，灰像分析など新たに各方面に分析を依頼して，科学的分析の幅も広がった。昨年度の年報で報告済みのようにアンペラの発泡ウレタンでの密封保存も実施した。だが，木器の保存処理については，数年来，センターとして優先的に取り組んでいるにもかかわらず，全く進展しなかった。遺物の保存処理への理解をもっと深めていくよう努力しなければならない。

本年度はたまたま発掘調査が少なかったため，様々な活動を行えたが，今後，大規模な発掘調査と並行して，その水準をいかに維持・発展させるかが大きな問題だ。木器の保存処理，常設の展示コーナーの確保，各調査地点の遺跡表示板の設置など積み残された懸案事項もまだまだ多い。助手2名(石坂，藤原)，技術補佐員1名(安井)が抜けて大幅に人員が減少することを考えると，不安が大きい。体制の充実を図ることはもちろん，各調査研究員が一層奮起して，学内外の理解・協力をさらに深めていくことが重要である。　(土井)

附　表

附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	遺跡名 調査地区名	種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積(㎡)	文献	備考
1980	鹿　田	立会	歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8.0		
1981	津島南 BD 26	〃	農	寄宿舎新営	〃			
	津島北	〃	文法経	合併処理槽埋設	〃			
	津島南 BD 09 BC 09 ～ 11	〃		基幹整備(共同溝取付)	〃			
	津島南 BD ～ BE 04 ～ 07	〃		陸上競技場改修 (配水管埋設)	〃			
	鹿　田	〃	医病	高気圧治療室新営	〃			
	〃	〃	〃	動物実験施設新営	〃 岡山県教育委員会			試掘調査をせず破壊 残存壁面等の調査
	〃	〃	〃	病理解剖体蔵器処理 保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃	〃	医	運動場改修	〃			
1982	津島 AV 06・10 AW05・14 AX 08, BD 07 BE 10	試掘		排水基幹整備	〃			津島 AW 14区で 弥生時代包含層確認，協議
	小橋法目黒 津島北 AW 14	発掘	法文	排水管集中槽 (NP 1)埋設	岡山大学	24.0	③	
	津島南	試掘	学生	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北 AY 15・16	〃	法経	校舎新営	〃	7.0		
	鹿　田	〃	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃	〃	医病	外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃	立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1	
	鹿　田 AE ～ AN 22 AE 22 ～ 26	〃	歯	電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

※文献１　光永真一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会
　　２　河本　清「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会
　　③　番号は附表３の番号に対応する。

附表２　1988年度以前の構内主要調査（1983～1988年度）

附表２－(1)　発掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(㎡)	備考	文献
1983	鹿　田 AU ～ BD 28～40	医病	Ⅰ次調査 (外来診療棟)	7.27～11.22 '84.1.9～3.31	2188	弥生時代中期後半～中世集落址	⑦
	〃　BG ～ BI 18～21	〃	Ⅱ次調査 (NMR－CT 室)	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落址	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(㎡)	備考	文献
1983	津島南 BE 14・18 BF 17・18, BG 14 BH 14・15	農	排水管埋設	'84.1.9～3.5	265	縄文時代晩期～弥生時代前期集落址	④
	〃 BH 13	〃	合併処理槽埋設	11.14～11.22 '84.1.9～3.5	276	〃 ～ 〃	〃
1984	鹿　田 AU ～ BD 28～40	医病	Ⅰ次調査	4.1～8.31	2188	弥生時代中期後半～中世集落址	⑦
1986	〃 CN ～ CU 27・28 CT ～ CY 19～27 CX ～ DD 16～25 DD ～ DG 22・23	医短	Ⅲ次調査 (校舎)	6.2～11.29	2390	古代～中世の集落址	⑩
	津島北 AV 00, AW 00・01	学生	男子学生寮	11.27～ '87.3.31	1550	近代～古代の水田址	⑥
	津島南 BF・BG 09	〃	屋内運動場	'87.1.19～1.22	70	弥生時代前期溝, 中世河道検出	〃
1987	津島北 AV 00 AW 00・01	〃	男子学生寮	4.1～6.19 8.24～9.5	1550 80	弥生時代水田址・縄文晩期貯蔵穴群 縄文後期～晩期の河道	⑧
	鹿　田 DD ～ DF 25 DG ～ DI 27・28	医短	Ⅳ次調査 (校舎周辺の配管)	11.2～11.21	30	古代の河道	⑩
	〃 BB ～ BH 35～42	医病	Ⅴ次調査 (管理棟)	10.6～'88.3.2 '88.3.23～3.31	1192	弥生中期後半～中世の集落址	⑧
1988	津島北 AY 06～08 AZ 06・07	大自	自然科学研究科棟	6.27～'89.3.19	1537	縄文後・晩期の貯蔵穴群と河道 弥生時代の水田址	⑪
	〃 AV・AW 04・05	工	生物応用工学科棟	9.20～'89.3.31	600	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 弥生～近世の溝と水田址	〃
	〃 AV・AW 05・06	〃	情報工学科棟	10.12～ '89.3.31	800	縄文後・晩期ピット群・炉址 弥生～近世水田址	〃

附表２―(2)　試掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	津島南 BH 13	農	合併処理槽予定地	2.5	弥生時代前期土器片 〈1983年度発掘調査〉	①
	〃 BE ～ BG 14 BE・BH 15 BE 18, BF 16～18	〃	排水管埋設予定地	2.0	〃 〈 〃 〉	〃
	〃 BF 17	〃	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5		〃
	〃 BF 22・23	〃	農場畜舎新営予定地	2～3.0	土器片出土, 造成土0.6m 〈1987年度工事立会〉	〃
	〃 BC・BD 15	事	大学事務局新営予定地	〃	土器片出土, 〃 0.9m	〃
	〃 BB 10	学生	保健管理センター新営予定地	〃	溝検出, 〃 0.8m	〃
	〃 BI 16	事	津島宿舎新営予定地	2.0	土器片出土, 〃 0.9m 〈1987年度工事立会〉	〃
	津島北 AW 05	工	校舎新営予定地	3.0	土器片出土, 〃 1.0m	〃
1984	鹿　田 BU 30・31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	中世土器・包含層確認, 〃 0.5～0.7m 〈盛土保存〉	②
	〃 CT・CU 25 〃 CZ 19・20・23・24	医短	校舎新営予定地	2.7	中世・古代の遺物出土, 〃 0.8～1.0m 〈1986年度発掘調査〉	〃
1985	津島南 DE 08	教養	議義棟予定地	3.5	遺構・遺物未確認, 〃 1.2m 〈1986年度工事立会〉	⑤

附　表

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1985	津島北 AX 02	教育	研究棟予定地	2.6～3.4	縄文～弥生時代土器出土，造成土1.2m	⑤
	〃 AV・AW 99～01	学生	男子学生寮新営予定地	2～3.0	縄文～中世の遺構・遺物，〃 1.0m 〈1986年度発掘調査〉	〃
	鹿　田 AJ 33, AI 40 AJ・AK 26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2～3.0	弥生～中世の遺物，〃 0.9～1.4m	〃
1986	津島南 BF・BG 09	学生	屋内運動場新営予定地	2.4 1.2～1.7	弥生前期溝・中世河道検出，造成土1.1m 〈1986年度発掘調査〉	⑥
	津島北 AY・AZ 07	大自	自然科学研究科棟新営予定地	1.6～3.2	縄文中期末～後期の遺構・遺物検出 造成土0.6～0.8m 〈1988年度発掘調査〉	〃
1987	土　生 AP 02	事	国際交流会館建設予定地	2.2～2.8	近世・弥生・縄文の遺構面確認	⑧
	津島北 AV 11	情	情報処理センター新営予定地	2.0～3.0	黒色土を標高2.2m前後で確認 遺構は未検出 造成土2.0m	〃
	〃 AY 09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0～3.5	近世・中世の遺物，中世・古代の水田址 造成土約1m 〈継続して発掘調査に及ぶ〉	〃
	津島南 BD 09	教養	〃	2.5	縄文時代土壙群を確認 縄文・中世・近世土器出土，造成土0.7m 〈継続して発掘調査に及ぶ〉	〃
1988	津島北 AX 04・06，AW 04	工	校舎建設予定地	2.0～3.5	黒色土を標高3m弱で確認 溝状遺構・水田址検出，縄文～近世土器出土 〈1988年度発掘調査〉	⑪
	津島南 BD 18・19	農 薬	動物実験飼育施設及び遺伝子実験施設	2.3	黒色土を標高約2.3mで確認 溝状遺構・縄文～中世遺物検出 造成土 1.1～1.2m	〃
	〃 BC 29	事	国際交流会館	2.5	近世・中世の遺物出土，造成土約1.2m 〈1988年度工事立会〉	〃

附表2－(3)　立会調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	東山	教育	附属中学校新営	4～5	シルト層中	①
	鹿　田 AR・AS 38, BC 40	医病	外来診療棟及び旧耳鼻科棟基礎杭保存状況確認調査	2.5～3		〃
	津島北 AX 15	文	中庭水銀燈地下ケーブル埋設	0.7	造成土中	〃
	鹿　田 AY 23	医病	旧中央診療棟埋設給水管修繕	1.0	〃	〃
	〃 AM 32	〃	外来診療棟シールド取付に伴うアース線埋設	2.0		〃
	〃 DC 39～42	〃	プール周辺植樹作業	0.7	造成土中	〃
	〃 AO～AW 22	〃	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	弥生後期土器（分銅形土製品），貝集積	〃
	津島南 BC～BF 18	薬	周辺排水用集中槽埋設 水道管埋設	2.5 1.5		〃
	津島北 BA 13	事	西門橋梁改修	2.6		〃
	鹿　田 BH 17～18	医病	混合棟北側ガス管埋設	1.0	造成土中	〃
1984	鹿　田 BG・BH 17・18	〃	NMR-CT 室新設関係排水施設取付	0.6～1.5		②

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1984	鹿　田 BD ～ BH 64	医	旧基礎医学棟中庭駐車場整備	0.8		②
	津島北 AW・AX 11 AZ・BA 12・13	情	通信用管路埋設	0.7～1.4	造成土0.9～1.2m	〃
	鹿　田 AE 36	医病	外来診療棟改築関係電柱架設	1.95	〃 1.25m	〃
	〃 BQ 33	〃	中診北病棟外来リカバリー室医療機器用取付	1.6	〃 1.5m	〃
	〃 BT 21	〃	厨房棟東側埋設ガス管修繕	0.8	造成土中	〃
	〃 DB 29	〃	看護婦宿舎前水道管修繕	2.0	中世包含層確認，中世・弥生土器出土 造成土1.15m	〃
	津島南 BI 16	事	非常勤講師宿泊施設新営	1.6	〃 1.0m	〃
	津島南 BI 15	〃	南宿舎合併処理槽取付	2.0		〃
	〃 BI 15～17	〃	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0～2.2	溝・土壙検出，須恵器・弥生土器出土 造成土1.0m	〃
	鹿　田 BA 16～22	医病	外来診療棟関係ガス管引込み工事	1.2～1.4	ほとんど造成土	〃
1985	〃 AW ～ BH 23 BH・BI 24	〃	〃　屋外排水管埋設	1.3～1.7	造成土0.7～1.3m 中世・弥生の遺構・遺物確認	⑤
	〃 CR 69	〃	看護学校構内水道メーター取設	1.0	造成土中	〃
	〃 AK ～ AM 43～46 AO ～ AT 42　他	医	基幹環境整備給排水その他工事	1.0	造成土0.8m，近世土器溜り検出	〃
	〃 AU ～ AW 40 BA 40～42	医病	基幹環境緑化工事，外来診療棟西	1.1	〃　，中世包含層確認	〃
	〃 AG 34～36 AL ～ AN 34～39 AU ～ AS 39	〃	〃　，外来診療棟北	1.1	〃　，　〃	〃
	〃 BA 22　他	〃	基幹環境整備給排水その他工事	1.15	造成土1.0m	〃
	津島北 AV 06・07	工	三次元棟新設関係排水管埋設 三次元棟建設	1.5～1.7	〃 1.0～1.5m，土器細片出土	〃
1986	鹿　田 CS・CT19～24 CM・CU 12・13 CR 14,CU・CW 15 CW・CZ 16，CH 33	医短	樹木移植	0.8～1.5	〃 1.0m	⑥
	〃 BI ～ BN 45	医	排水・汚水管改修	0.8～1.3	〃 0.8m	〃
	津島南 BE 08・09	教養	校舎新営	2.3	〃 1.3m，中・近世土器・溝検出	〃
	鹿　田 BV 10，CY 29 DD 29,CK 27 CL ～ CW 26～29	医短	〃　設備	0.5～1.2	〃 0.8～0.9m	〃
	津島北 AU 04・16・17 AV 15	文	樹木移植	1.0～1.6	造成土内	〃
	〃 AV 16・17	〃	グランド改修	3.5	造成土1.5m	〃
	津島南 BG 08	学生	ハンドボールコート新設	0.2～2.0	〃 0.8m，黒色土確認	〃
	津島北 AX 16	文	動物実験室新営	0.95	造成土内	〃
	鹿　田 CL ～ CR 12 CR ～ CX 13 CX ～ DA 14	医短	護岸及び囲障工事	2.0	造成土0.8～1.0m，中世包含層	〃

附　表

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1986	津島南 BF 07・08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	造成土0.9m，中世包含層	⑥
1987	鹿　田 BC 37	医病	管理棟新営に伴う基礎抗確認	2.5	弥生時代包含層・遺構確認	⑧
	津島北 AY 09	理	身体障害者エレベーター設置に伴う汚水管移設	1.2 一部1.6	造成土1m前後	〃
	津　島 AQ 02・03	事	土生宿舎屋外排水管改修	0.7	〃 0.6m	〃
	津島北 AW 01	学生	馬場東給水管修理	2.0	〃 0.96m，谷部分	〃
	鹿　田 CW 14～17	医短	校舎新営　配管	1.3	〃 1.16m，中世水田層	〃
	〃 DC ～ DE 23	〃	〃　〃	1.9	〃 1.1m，攪乱内	〃
	〃 CW 16	〃	〃　樹木移植	1.2	〃　〃	〃
	〃 DF 24 DG 24～26	〃	〃　〃	1.6 3.0	〃　〃，中世層確認 〃　〃，攪乱内	〃
	〃 DD ～ DF 24 DF 23・24	〃	〃　〃	1.38 1.8	〃　〃 〃　〃，中世層確認	〃
	津島南 BF 22・23	農	農場施設新営	1.8	〃 1.25m	〃
	〃 BG 22	〃	〃　合併処理槽	3.6	〃 1.2m，自然流路内	〃
	〃 BE 17～21	〃	〃　電気	0.7～1.5	〃　〃	〃
	〃 BE 22	〃	〃　給排水	3.0	〃 1.3m	〃
	鹿　田 BA 17～21	医病	旧混合病棟北駐輪場基礎	0.6	造成土内，弥生土器出土	〃
	〃 CM・CN 30～43 〃 CC ～ CN 45～47	〃	道路排水整備	0.7～1.1	〃，深度1.1m地点のみ造成土65cm	〃
	〃 CH・CI 56・57	医	動物実験施設焼却炉桝部掘削	1.0～1.2	造成土0.8m	〃
	〃　〃	〃	〃　配管	0.3～1.0	〃　〃	〃
	〃 CM 13～26 CN ～CQ 14 CP ～ CI 14 CO ～ CR 26・27	医病	脳代謝棟北給水管改修	0.8～0.9	〃　〃	〃
1988	津島北 AY 11・AZ 11	情	情報処理センター通信線付設	1.2	造成土0.8～0.85m	⑪
	鹿　田 AE 41, AJ・AO 43 AV 40	医病	管理棟新営に伴う電柱架設	1.6	造成土0.6～1.4m	〃
	津島北 AZ 06	大自	大学院新営に伴う電柱架設	2.3	造成土0.8m	〃
	津島南 BF・BG 10・11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2 1.4～1.5	黒色土を表土下約2mで確認 西に向かう落ちが推定される 造成土1.5m	〃
	〃 BC 26	事	国際交流会館　本体部分	1.0 2.4～2.9	〃 1.5m	〃
	〃 BB 25・26	〃	〃　電柱架設	1.7～1.9	〃 1.0m，以下は灰色粘土	〃
	〃 BB 26	〃	国際交流会館　合併処理槽	2.2	造成土1.3m	〃
	鹿　田 AY 47	医	玄関付近外灯設置	1.0～1.3	造成土内	〃
	津島北 AU 09・10	工	機械工学科・精密応用科学科 実験棟電気改修	1.4～1.6	造成土1.4m	〃

※　発掘・試掘調査については全てを，立会調査については主要なもののみを対象としている。
文献番号は附表3・4に対応する。

附表 3　埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名　　称	発行年月日
①	岡山大学構内遺跡調査研究年報 1　1983年度	1985年 2 月28日
②	岡山大学構内遺跡調査研究年報 2　1984年度	1985年 3 月30日
③	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 1 集	1985年 5 月 7 日
④	岡山大学津島地区遺跡群の調査　（農学部構内BH13区他） 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 2 冊	1986年 3 月31日
⑤	岡山大学構内遺跡調査研究年報 3　1985年度	1987年 3 月31日
⑥	岡山大学構内遺跡調査研究年報 4　1986年度	1987年10月31日

附表 4　埋蔵文化財調査研究センター刊行物

番号	名　　称	発行年月日
⑦	鹿田遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 3 冊	1988年 3 月31日
⑧	岡山大学構内遺跡調査研究年報 5　1987年度	1988年10月31日
⑨	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第 1 号	1988年10月
⑩	鹿田遺跡Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 4 冊	1990年 3 月31日
⑪	岡山大学構内遺跡調査研究年報 6　1988年度	1989年10月14日
⑫	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第 2 号	1989年 8 月
⑬	〃　　第 3 号	1990年 2 月

附　編

半田山城測量後記

土井基司

はじめに

半田山城は，半田山山塊の西寄り山頂，標高136mに立地する。『岡山市史[1]』や『日本城郭大系[2]』などでわずかにその概要が紹介されているだけで，本格的な調査の手は全く入っていなかった。そうしたなかで，岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは，1989年度の「都市近郊林(半田山)の自然特性およびその環境保全機能に関する研究」の一環として，半田山城の測量調査を実施することになり，センター職員が中心となり調査した。調査は石坂俊郎が担当し，成果報告も石坂が執筆した。ここではその成果に基づいて，関連する資料(遺跡，文献，地名)を総合的に検討しながら，半田山城をめぐるいくつかの問題点を提起したい。

測量成果（図１）

測量成果は一応報告されている[3]が，大学内部向けの報告書という性格が強いので，ここで改めてもう１度報告しておきたい。内容は，石坂の報告に全面的に依存し，部分的に要約するにとどめた。

基本形態は，東西方向に展開する連郭式山城である。郭ごとに順次説明する。

山頂を取り込む形で最高部に主郭を置く。東西55m，南北30mの矩形で，山頂はそのほぼ中心にあたっている。山頂周辺は約20m四方が一段高くなっているようにも見え，削平が徹底しなかったためかもしれないが，城内の中心的施設が存在した可能性もある。南東部分は，北東方向から進入する林道によって変形している。

主郭の東側に，一段下がって東第１郭(仮称)を設ける。南辺を林道に破壊されているため正確な規模は不明だが，東辺14m，西辺26m，東西幅14mほどの台形だろう。主郭との標高差は約４mである。斜面を削りだした結果，東辺部直下，標高差４mでも幅４mほどの平坦面と，その東縁にごく低平ながら土塁状の高まりが認められる。ただし北から進入する山道と重複しており，本来どおりの形状とは断定できない。

主郭の西には2.5m下がって西第１郭(仮称)が隣接する。東辺38m，西辺29m，東西幅13mの台形である。主郭から西第１郭へは，現在，舌状のスロープが張りだしているが，西第１郭から西接する西第２郭(仮称)へも同じ状況にあり，廃城後，後世改変されたものとみておきたい。

西第１郭から西へ２m下がって西第２郭，さらにその北西部と重複する形で，数10cm下がっ

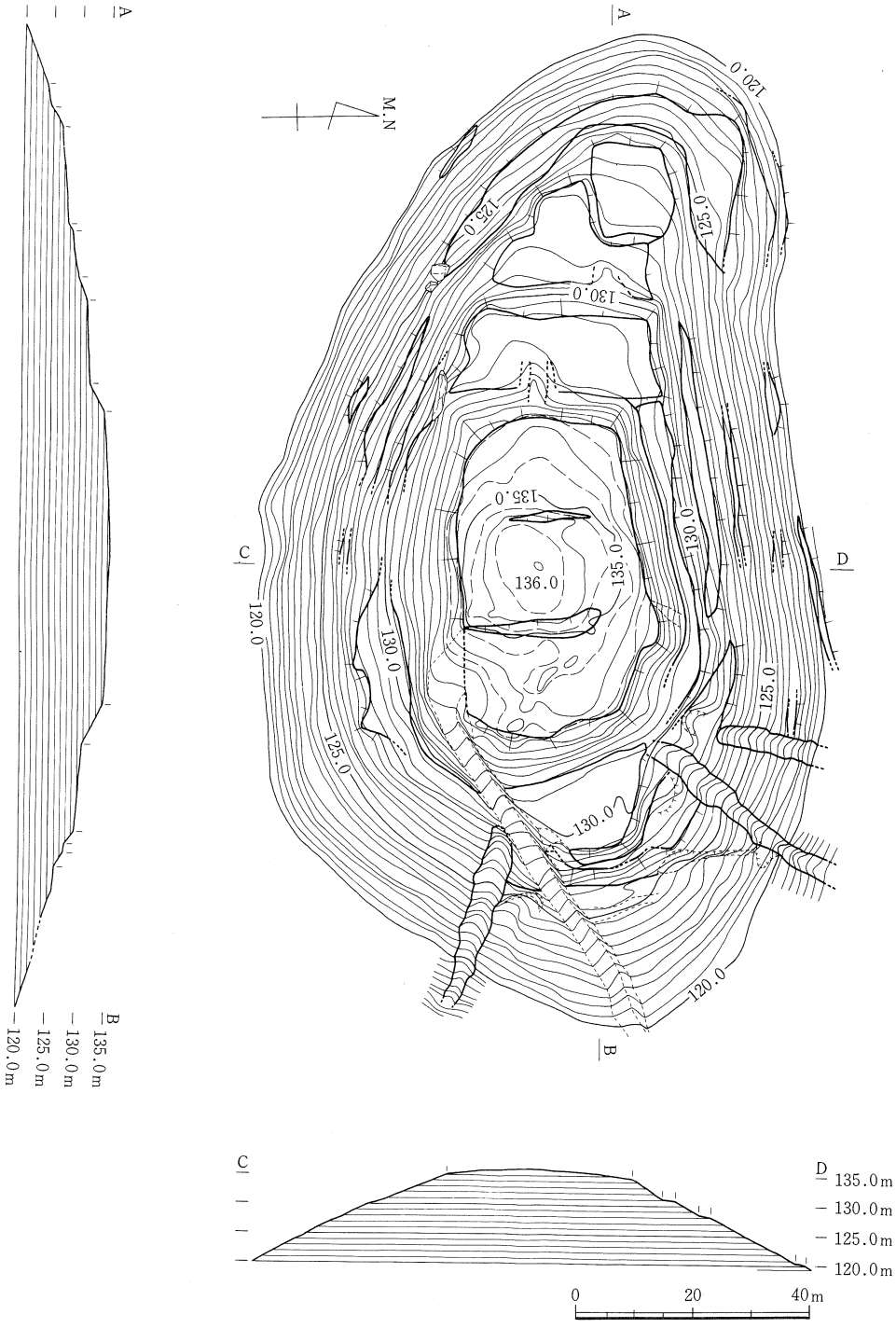


図1　半田山城跡測量図　(縮尺1/1200)　註(3)文献より

て西第３郭(仮称)が展開する。西第２郭は東辺27ｍ，西第３郭を除く西辺10ｍ，東西幅17ｍ。西第３郭は西第２郭との標高差がわずかだが，東西15ｍ，南北13ｍの方形に見え，一応分けておく。

西第２郭・西第３郭の下方には，東を除く三方を囲む腰曲輪が設けられる。上方からの崩落土が堆積しているため，明確なラインは断定しがたいが，本来，幅５～６ｍ，上方との標高差2.5ｍ前後と思われる。

主郭の南・北斜面には，最低２段の犬走り状のテラスが認められる。比較的明らかな北斜面でみると，上段は131ｍ付近で，幅２～５ｍ，主郭との標高差３ｍ。下段は標高128ｍ付近で，幅２～３ｍ，上段との標高差2.5ｍ。南斜面は崩落がはげしいが，上段が標高129～130ｍ付近に，下段は西寄りに一部だが，標高127ｍ付近に認められる。上段と主郭との標高差4.5～５ｍ，東半はやや幅が広く，腰曲輪の可能性もある。東・西第１郭と南・北上段テラスはそれぞれほぼ同じレベルに位置する。その他にも，標高120ｍ付近などに断片的に平坦面が認められる。

郭以外の施設として，東第１郭周辺で３条の竪堀が確認された。幅３～５ｍ，いずれも上端は標高129ｍ付近に達し，北斜面西側のものは標高120ｍ，同東側のものは117ｍ，南東斜面のものも117ｍ付近まで下がっている．標高差12ｍ前後である。

以上，半田山城は，東西長140ｍ，南北幅70ｍ以上，各郭が主郭を頂上に稜線上に並ぶ連郭式山城である。竪堀は３条認められたが，堀切，土塁は確認されなかった。角礫が各所に散在するものの石垣は認められなかった。虎口，井戸などの諸施設も不明である。踏査の結果，城の南斜面，標高120ｍを下った辺りから，竪堀状の遺構が１条延々と下っているのが確認されたが，城に伴うものかは確かでない。

津島周辺の中世遺跡（図２）

半田山城の歴史的背景を理解するために，まず『岡山市埋蔵文化財分布地図』をもとにして，半田山周辺の中世の遺跡について説明する。

はじめに城郭から述べたい。ほとんどが山城だが，半田山周辺の城の分布密度はかなり高い。後にふれるように，中世山陽道が通い交通の要衝である，旭川西岸の肥沃な沖積地をひかえている，戦国時代後期，松田氏，後には三村・毛利氏対浦上・宇喜多氏の勢力争いの主な舞台となった，等の要因が考えられる。

龍ノ口山城，船山城，妙見山城，半田山城，烏山城，蜂矢城，山崎城などが中世山陽道沿いに立地している。龍ノ口山城をめぐる戦いは数度にわたって行なわれており，また，明禅寺山城の攻防を中心とした「明禅寺合戦」は，備前における宇喜多直家の覇権が確立した戦いとして有名である。しかし，発掘調査などによってその実態の一部でも明らかになっているのは，富山城ぐらいしかない。(4)

図２　遺跡分布地図　（縮尺1/75000）
（国土地理院1/50000　岡山北部・南部を縮小）

1　龍ノ口山城（戦国）　2　船山城（戦国）　3　妙見山城（戦国）　4　半田山城（戦国）　5　烏山城（戦国）
6　蜂矢城（戦国）　7　山崎城（戦国）　8　富山城（戦国）　9　高柳城　10　城跡　11　岡山城（戦国～江戸）
12　妙禅寺城（戦国）　13　金山寺　14　寺院跡（室町）　15　堂敷山廃寺（中世）　16　清水廃寺（中世）
17　堂屋敷廃寺（平安～中世）　18　常円寺跡？　19　妙善寺（福輪寺？）　20　石井廃寺（奈良～中世）
21　賞田廃寺（飛鳥～中世）　22　幡多廃寺（奈良～中世）　23　散布地（古墳・中世）　24　散布地（古墳～中世）
25　散布地（中世）　26　首塚（中世？）　27　鹿田遺跡（弥生～江戸）　28　二日市遺跡（弥生～江戸）　29　散布地（古墳・中世）
30　備前国庁跡（古代～中世）　31　国府遺跡（古墳後期～中世）　32　操山202号遺跡（貝塚，平安～中世）
33　犬塚山経塚（中世）　34　操山205号，206号遺跡（貝塚，古代～中世）　35　円山１号～５号貝塚　36　「城」字名所在地

城郭以外では，寺院跡が多いのが目立つ。中でも金山寺は，「金山寺文書」という豊富な古文書が残り，岡山の中世史を考えるうえでの貴重な資料となっている。また，半田山南山麓には，福輪寺と呼ばれる寺があったと伝えられ，『源平盛衰記』や『平家物語』に，「福輪寺阡」あるいは「福隆寺縄手」としてその名があらわれる[5]。伝承では福輪寺が日蓮宗に改宗して妙善寺になったという。妙善寺は松田氏の強い保護を受けた寺だが，江戸時代にいったん断絶し，明治になって現在地に復興した。そこが元来の所在地かははっきりしない。常円寺は宅地開発で地形が大きく改変を受け，地名からしかその存在を窺えない。

中世の御野郡南部，旭川西岸のデルタ地域には，古代からつづく鹿田庄をはじめ多くの荘園が存在していた。荘園の様子が知れるような遺跡は，現在のところ，岡山大学鹿田キャンパス所在の鹿田遺跡[6]や，二日市遺跡[7]しか見つかっておらず，考古学的にその実態を復元するまでにはいたっていない。

その他に，岡山大学津島キャンパスでは発掘調査が数地点で行なわれており，中世の水田跡が確認されている[8]。中世の津島村は基本的には農村だったと考えられる。

以上のように，周辺に多くの遺跡が存在するにもかかわらず，中世の御野郡の様子は不明な点が多く，考古学からみた，開発領主とその支配拠点としての居館，山城との関係は全くといっていいほどわかっていない。

文献上の中世津島周辺

中世の津島付近について様子がわかる史料はほとんどない。わずかに軍記物語のようなものがあるだけである。

①『源平盛衰記』『平家物語』

対象時期より少し古いが，『源平盛衰記』や『平家物語』にこの辺りについての記述がある。その概略を説明しよう。備中国の出身で，平家の家人であった妹尾兼康は，倶利加羅峠の戦いで破れ，木曽義仲軍の捕虜となった。やがて義仲は京より平家を追い落とし，平家は屋島に逃れた。義仲はそれを追撃しようと備前方面に出陣したが，その時兼康は先陣の案内役を申し出て許された。ところが，これは兼康の謀略で，彼は途中，藤野で監視役を切り殺して遁走した。怒った義仲は大軍を追っ手として差し向けたが，兼康はわずかな手勢を率い「佐佐迫(ササノセマリ)(篠の迫)」の城にたてこもりこれを防いだ。しかし，奮戦かなわず落ちのびる途中戦死した。

ここにでてくる佐々迫の合戦のシーンに，「福輪寺阡」あるいは「福隆寺縄手」の名が登場する。この福輪寺縄手は，後に詳しく触れるが，中世山陽道の一部と考えられており，現在の岡山大学津島キャンパスの辺りにあったと推定されている。また佐々迫の城は，文中の「福輪寺阡(フクリンジノチマタ)を堀掘切て，管植逆母木引(ヒシウエサカモギヒキ)きなどして，馬も人も通難(カヨイガタ)く構(カマヘ)たり。」という記述か

ら，中世山城のような城郭というより，阻塞のようなものと想定されている。因みに，この部分の記事なども参考にして，城郭史研究においては，平安時代末から鎌倉時代の城は阻塞とか切岸のような単純な施設を指し，鎌倉時代末から南北朝時代になってはじめて中世山城のような城が成立すると考えられている。

周囲の景観を文中から復元すると，福輪寺縄手の北には険しい半田山山塊がそびえ，南には一面水田が広がっていたようだ。水田は沼田と表現されていることから，湿地状の土地と思われる。佐々迫北側の津高郷の谷口は沼地が多くあったらしい。

②『太平記』

『太平記』には，関連する可能性がある記事が2箇所でてくる。1つは，巻16「西国蜂起官軍進発事」の条，足利尊氏が九州におちのびた後の足利勢の巻返しの様子を述べた部分にでてくる，「備前には田井，飽浦，頓宮，松田，福林寺の者共，石橋左衛門佐を大将として甲斐川，三石二箇所の城を構へて船路，陸路を支えんとす。」という記事で，もう1つは，巻38「諸国宮方蜂起事」の条，山名時氏が備前・備中に侵攻した時，備前の諸将が城にたてこもったまま戦わなかった事を記した文中の「其の国の守護勢，松田，河村，福林寺，浦上七郎兵衛行景等…（略）…」の一文である。

このなかに「福林寺」氏という豪族の名が見られる。「福林寺」は「福輪寺」と同音であるし，後に述べるように，妙善寺の西隣には「福林寺」という字名が実際存在する。このことから，福林寺氏は，津島周辺を根拠地にしていた可能性が高いといえよう。

③『中国兵乱記』

『中国兵乱記』は，元和元年(1615)，中島元行が自己の体験した合戦とその功績を著したものである。したがって，自己の活躍を誇張する傾向や，記憶に頼っているので不正確な部分もいくつかある。しかし，実際に現場に居合わせた人物の書き残したものとして，その資料的価値はかなり高いと思う。

さて，津島周辺の様子がでてくるのは，「明禅寺合戦」に絡む部分の記述である。これは作者の初陣の合戦で，年少だったこともあって，永禄10年(1567)のこの事件を永禄7年の龍の口山城をめぐる合戦と混同している。だが，その内容は詳細で多くの固有名詞がでてくるので，津島近辺の状況がかなり詳しく想像できる。

備中を出陣した三村軍は三隊に別れて，明禅寺山城，国府村方面をめざしたが，元行はそのうち半田山南麓を進んだ隊に属していた。隊の先行部隊が旭川を渡った頃，元行はちょうど津島の辺りを進んでいて，後方部隊の裏切りにあった。その時の元行と他の諸将の奮戦ぶりが詳しく描かれている。

その文中に，「福輪寺の要害」，「妙善寺の砦」，「笹瀬山の城」，「津島七右衛門の要害」，「羽

武山の峰の要害」，などの５つの城あるいは居館と考えられるものが登場する。それぞれが現在のどこにあたるかは，烏山城と考えられる「笹瀬山の城」以外確定はできない。また，「津島七右衛門」や「津島孫兵衛」などの人名が見え，津島辺りを本拠にする豪族と思われるが，具体的な人物像は明らかでない。ほかにも，「羽武の峰の尾崎」，「福輪寺山」，「福輪寺の首塚」，「津島村千騎谷」という地名が現われる。

半田山南麓の字名（図３）

地名の調査にあたっては，本来地籍図などによった綿密な手続きが必要なのだろうが，今回は，岡山市役所資産税課にある，地押図と地番図によった。まず地押図で地名を調べ，地番を比較して現在の地番図と照合し，それと都市計画図を重ねて，地形図に地名を投影させた。

今回の調査の結果でもっとも注目すべきは「城」という地名だろう。立地からいって，山城に由来するというより居館に関係すると考えられる。後でも詳しく検討するが，その位置からして，半田山城と関連する居館の可能性がある。

つぎに目立つのは「常円寺」，「勧祥院」，「寺屋敷」，「法京寺」，「福林寺」，「十乗坊谷」など寺院に関係すると思われる地名が多く存在することである。「福輪寺」が常円寺から十乗坊谷にいたる場所のどこかにあったことをうかがわせる。

まとめ

以上，測量成果，周辺遺跡，文献，地名など，半田山城に関連する事柄をみてきた。以下では，これらを総合的に検討しつつ，半田山城の縄張り，福輪寺縄手，居館をめぐる諸問題について若干の見通しを述べてまとめにかえたい。

①半田山城の縄張り

測量図をもとに半田山城の縄張りについて考えてみたい。縄張り図は城郭研究にとっては最も基本となる資料であり，復元模式図としての側面と略測図としての側面がある。未実測の城の場合は，踏査によってその二面を同時に表わさなければならないが，測量図が存在する場合は，復元想定図と考えていい。したがって，ここでは縄張り図の作成を以て縄張りの復元にかえたい。

縄張り図を作る前に，今までの半田山城の縄張りに関する諸説を紹介する。

最初の縄張り図らしきものは，津高郷土会の略測図である[(9)]（図４）。城名は戸月城あるいは都月城とされているが，周囲の状況から，現在の半田山城を指すようだ。この図では，城は４段の長方形が重なる形で示されている。大胆に模式化した図だが，実際の形態からはまったくかけ離れている。竪堀等の施設については言及してないが，井戸は，北側山麓に想定している。

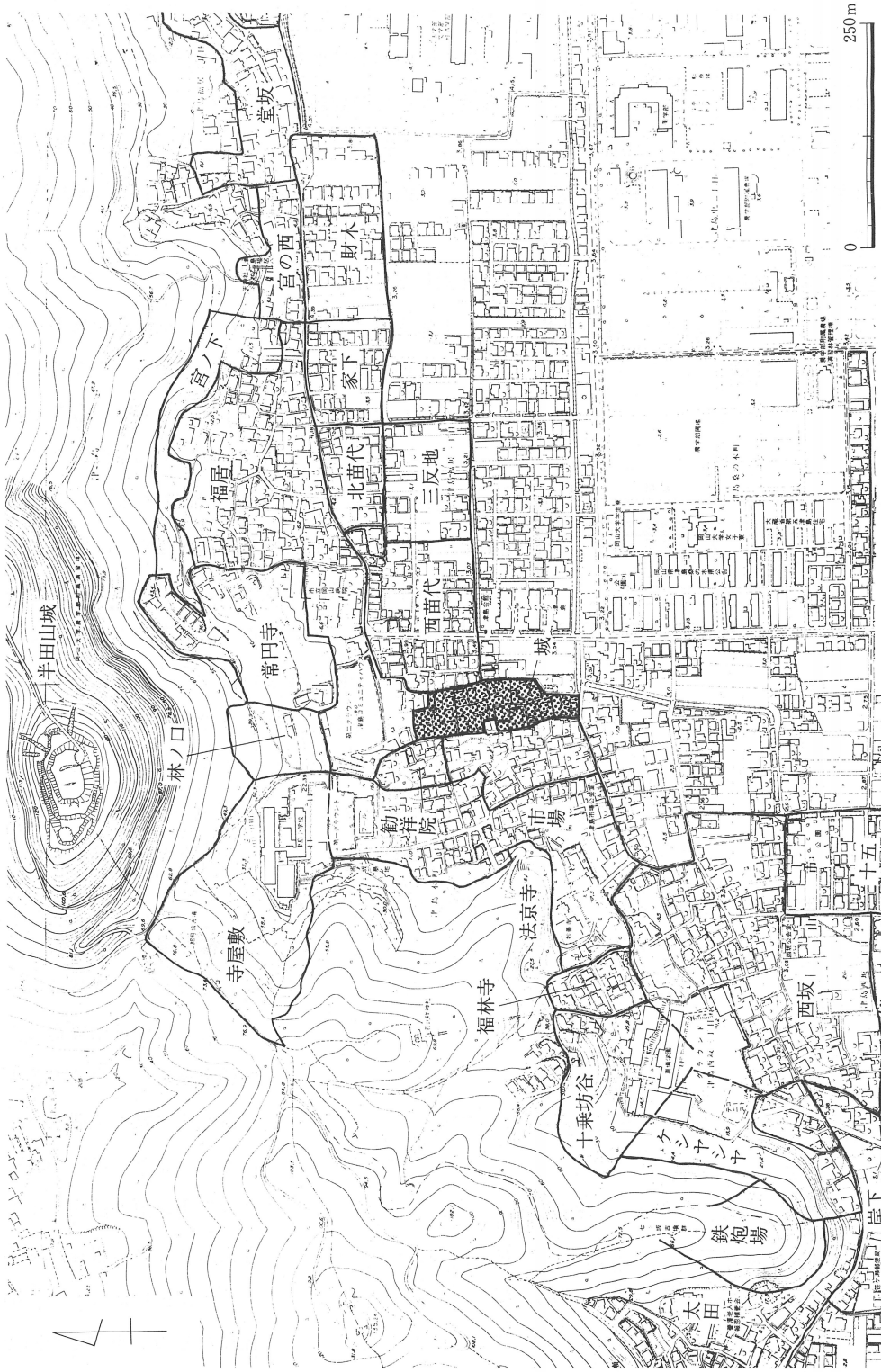


図3　半田山山麓字名図　（縮尺1/7500）

ついで，『岡山市史』政治編[10]に「半田山の城」として紹介されている。7段の連郭式の城と考えており，大体現状の形態に近いが，最西端の腰曲輪が描かれていない。竪堀等の施設についての言及はない。このころは曲輪以外の施設についての認識がまだ弱かったと思われる。

『日本城郭大系』第13巻[11]は図面が示されてないが，縄張りについては『岡山市史』政治編を基本的に踏襲している。単純縦列連郭の配置から，戦国後半まで下るものではないと時期比定している。

以上の先行研究を参照しつつ測量結果から縄張りを想定してみよう(図6)。

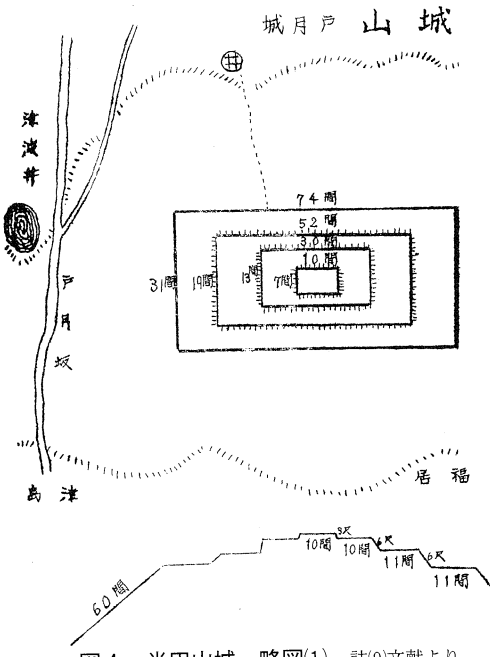


図4　半田山城　略図(1)　註(9)文献より

上記3者とも本丸と考えている頂部の高まりは下段との比高差もほとんどなく，独立した郭とは捉えられない。また西第2郭と西第3郭も本来は同一の郭とみて，主郭と，東に1郭，西に2郭の4段からなる連郭式山城と推定する。さらに，東・西第1郭が上段の犬走りと連結し，西第2・3郭と下段の犬走りも連結して，最西端の腰曲輪とともに3重に主郭をめぐる構造になっていたと思われる。竪堀は3条のみで，尾根筋にも堀切が確認できないが，これだけでは防御施設としての機能が弱く，埋没してしまった可能性が考えられる。水利施設はまったくわからない。年代は，『日本城郭大系』をこえるような成果はあがっておらず，戦国前期以前としかいえない。

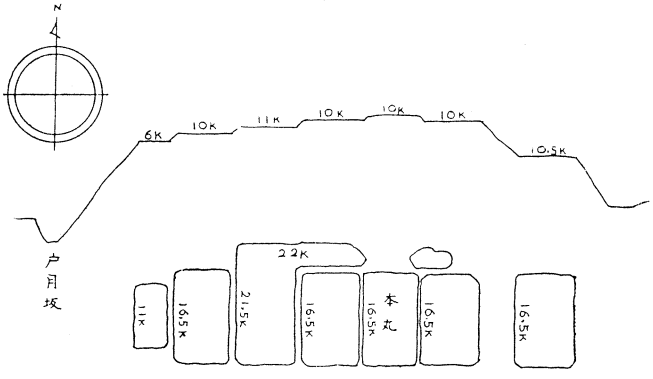


図5　半田山城　略図(2)　註(1)文献より

②福輪寺縄手

石坂は報告の考察のなかで，とくに中世山陽道との関係を重視し，交通の要衝に占地する城と位置付けている[12]。つまり，半田山周辺の中世山陽道に該当すると考えられている福輪寺縄手と，半田山城がどういう関係になるのかが大きな問題となろう。

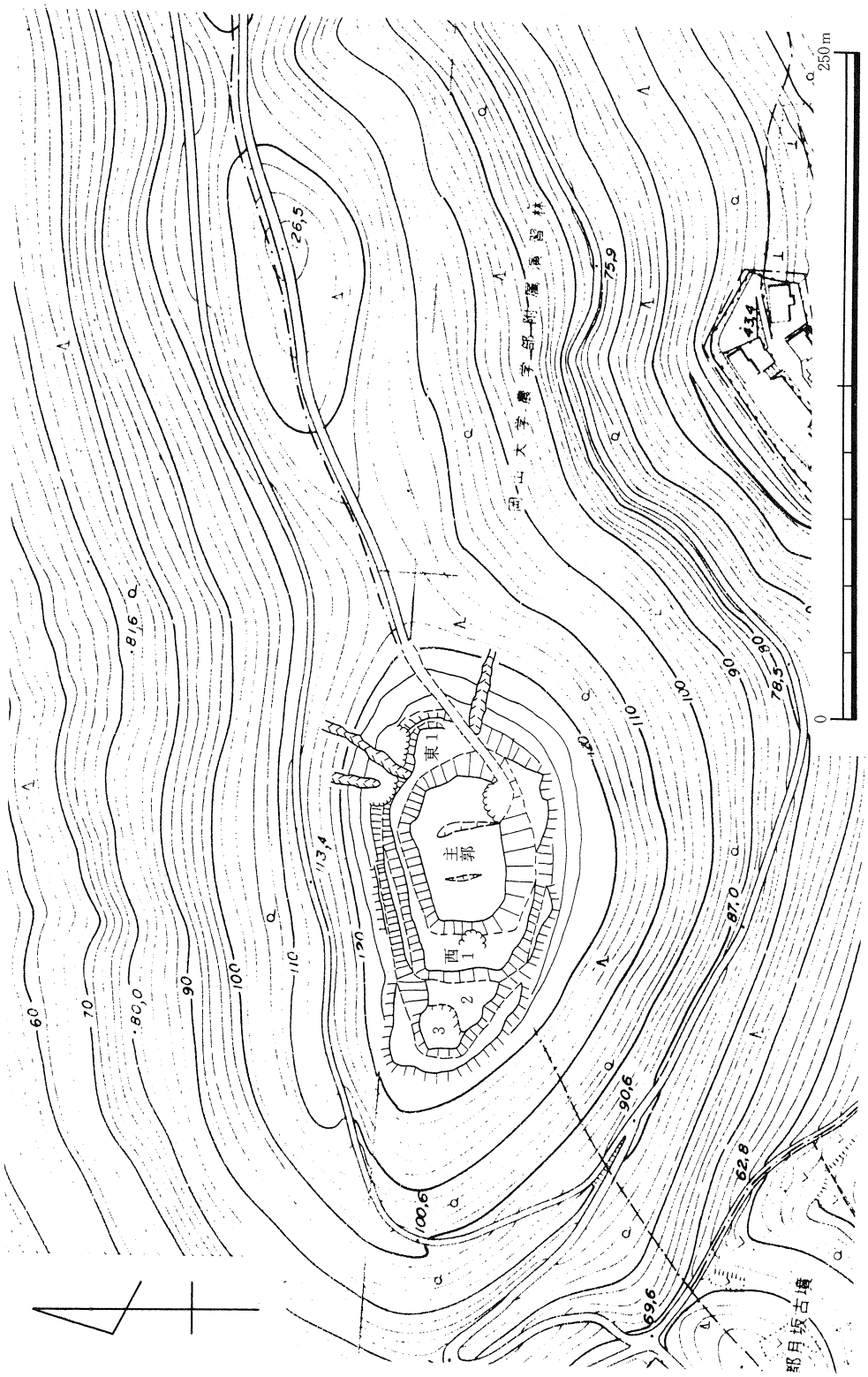


図6　半田山城縄張図　(縮尺1/2500)

福輪寺縄手がどこにあったかは福輪寺の所在地とかかわってくる。『岡山市史』古代編では，福輪寺が日蓮宗に改宗して妙善寺と改めたときに市場の辺りに移転し，その跡が末寺として常円寺になったと推測している[13]。「寺屋敷」などの地名をその証拠としてあげている。現時点では，それを否定する材料も肯定する材料もないが，寺院に関係する地名は市場や西坂の周辺に多く分布しており，その中のどこかに福輪寺の中心があり，一帯に広く寺域を構成していたと考えておきたい。

つぎに古代の計画古道や条里制から推察してみよう。

足利健亮は，福輪寺縄手を，国府の真ん中を横切る直線道の続きと推定し，図面からみるかぎり，現在の岡山大学津島キャンパスの北辺を走る道をその名残とみている[14]。しかし，この道は平地を横切る計画古道としては蛇行しすぎており，また，『源平盛衰記』や『平家物語』の記述からすると，道の左右は水田と思われるので，山裾を走るこの道はふさわしくない。

御野郡の条里の方向は，国府付近の条里の方向と一致しており，国府を横切る直線道は条里の一部をなしている[15]。したがって，福輪寺縄手もその条里ライン（E－F－G）に沿って走っていた可能性が強いだろう（図２）。岡山大学津島キャンパスでは，男子学生寮予定地および工学部生物応用工学科棟予定地の調査で，まさにその条里ラインにそった大規模な溝が検出された[16]。その溝の脇に1.5～２ｍの間隔を置いて平行して走る幅２～３ｍの溝がある。髙重進は２つの溝にはさまれた部分を道と捉えて，これを福輪寺縄手と推測している[17]。しかし，出土遺物から，この条里の溝は平安時代前半を中心とした時期に機能していたと思われ、平安時代の末まで下るかどうかは今のところわかっていない。男子学生寮予定地では，その上層でも同じ位置に幅広の畦畔が検出されており，それが福輪寺縄手に相当する可能性があるが，時期が確定しておらず断定はできない。正式な報告書が出るまではどちらが妥当かの判断はつきかねる。いずれにしても，E－F－Gライン上に福輪寺縄手があったことが推測される。

③居　館

半田山城は有事籠城型山城であり，それに対応する日常生活の場，居館がどこかに存在したはずである[18]。居館と山城が必ずしも近接するわけではないが，半田山城が比較的小型の城であり，その支配領域はそれほど広くないと思われるので，居館は麓付近にあった可能性が非常に高い。

最も有力なのは，先述のように「城」地名が残る地区である。ただし，ここは，半田山の南斜面が麓近くで傾斜をゆるめ，なだらかに南にのびた低丘陵の，東側の一段低くなった平坦地に相当する。水田地帯よりは少し高くなっているが，あまり適した場所とは言えない。むしろ，西に接する「勧祥院」の辺りが最適ではなかろうか。現状ではここに居館跡を想定しておく。

半田山城が都月坂を見下ろす交通の要衝に位置することは否定しがたい事実だが，都月坂を

押さえるための城かどうかは検討を要する。在地の小領主単独の力で幹線道路である山陽道の一角を押さえるのは不可能に近い。それを維持するためには，かなりの広域を支配するような有力国人や大名の戦略的展望が必要である。そのような城にしては半田山城の規模は小さすぎる。[19] また，郭の規模などから考えて，常時兵が駐屯し通行する物資，人間を上から監視して，流通を管理していたとも考えがたい。そういう機能は居館のほうに求められるべきだろう。

居館の位置を「勧祥院」と仮定すると，先に推定した福輪寺縄手が，都月坂にむかって屈曲しつつ上っていく，その入り口にあたることになる。つまり，中世山陽道の交通の要所に立地しているわけである。開発領主としての性格から，水利の管理に有利な場所に居館が位置していることが多いが，流通を管理することを重視した領主も存在した可能性があり，[20] この場合はそれに相当するのかもしれない。市場という地名がまわりに広がっているのも，そういった性格をうかがわせ興味深い。[21]

以上，長々ととりとめのない話をつづけたが，筆者の未熟さゆえ，全くまとまりのない内容になってしまった。測量調査を担当し，かつ，日頃からこのような問題について熱心に研究されていた，石坂氏が本来執筆すべきところを，氏の転出によって急遽私が担当することになったため，泥縄の感は否めないが，なにとぞご容赦願いたい。

本文を執筆するにあたって，角田茂，出宮徳尚，久野修義，石坂俊郎の各氏には貴重なご助言・ご指導をいただき，また，近藤義郎，髙重進，新納泉，山本悦世，絹川一徳，若林卓，大橋かおりの各氏からは多大なるご助力を得た。末筆ながら，記して感謝したい。

註

（1） 巌津政右衛門　1964　「第一編　中世　第六章　岡山平野の豪族たち　二.市域にある城跡」『岡山市史』政治編　巌津政右衛門編

（2） 出宮徳尚　1980　「岡山県　半田山城」『日本城郭大系』第13巻 広島・岡山　西本省三・葛原克人編　新人物往来社

（3） 新納泉・石坂俊郎ほか　1990　「半田山城跡の測量調査」『都市近郊林(半田山)の自然特性およびその環境保全機能に関する研究(Ⅳ)』平成元年度岡山大学教育研究学内特別経費研究成果報告書

（4） 巌津政右衛門ほか1968　『富山城跡第１次調査報告』　岡山市教育委員会
巌津政右衛門・水内昌康ほか　1969　『富山城跡第２次調査報告』　岡山市教育委員会

（5） 一般に「福輪寺縄手」と俗称されており，本文でも支障のないかぎりこれを用いる。

（6） 山本悦世ほか　1988　『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山本悦世ほか　1990　『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第４冊　岡山大学埋蔵文化財

調査研究センター

(7)　出宮徳尚　1985　「岡山市二日市遺跡」『日本考古学年報』35　日本考古学協会

(8)A　松岡かおり　1987　「2　発掘調査　①学生部男子学生寮改築に伴う発掘調査(津島北地区AV00・01区)」『岡山大学構内遺跡調査研究年報5』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

B　土井基司　1989　「2　発掘調査　②工学部生物応用工学科校舎新営に伴う発掘調査(津島北地区AV・AW04・5区)」『岡山大学構内遺跡調査研究年報6』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

ただし，畦畔ではなく畝状遺構が検出されており，畑の可能性もある。

(9)　青井若太郎　1941　『史蹟及び古蹟』横井村誌十輯之内第五輯　津高郷土研究会

(10)　(1)文献に同じ

(11)　(2)文献に同じ

(12)　(3)文献に同じ

(13)　巌津政右衛門　1962　「第六編 平安時代　第一章 平安時代の仏教　四．福隆寺跡」『岡山市史』古代編　巌津政右衛門編

(14)　足利健亮　1974　「吉備地方における古代山陽道・覚え書き」『歴史地理学紀要』16号　歴史地理学会

(15)　石田　寛　1962　「第四編 岡山市域の条里」『岡山市史』古代編　巌津政右衛門編

(16)　(8)A、(8)Bに同じ

(8)A報告文中では河道として認識されているが，規模，形状，位置からみて，(8)B報告の溝と同一の溝と考えるのが妥当だろう。

(17)　髙重　進　1990　「第2章 吉備と律令体制の成立 第4節 山陽道」『岡山県史』第三巻 古代Ⅱ　岡山県史編纂委員会

(18)　(2)文献に同じ

(19)　出宮徳尚氏のご教示による。

(20)　久野修義氏のご教示による。

(21)　城館と市場の有機的関係は，地名考証などから指摘されている。

谷重豊季　1989　「中世加賀・能登地域における「町」について－歴史地理学的アプローチ－」『金沢大学文学部地理学報告』第5号

参考文献

『岡山市史』政治編　1964　巌津政右衛門編

『岡山市史』古代編　1962　巌津政右衛門編

『日本城郭大系』第13巻 広島・岡山　1980　西本省三・葛原克人編　新人物往来社

『岡山市埋蔵文化財分布地図』　1983　岡山市教育委員会

『岡山県史』第三巻 古代Ⅱ　1989　岡山県史編纂委員会

『岡山県史』第四巻 中世Ⅰ　1989　岡山県史編纂委員会

『岡山県史』第十九巻 編年史料　1988　岡山県史編纂委員会

『源平盛衰記』『平家物語』『太平記』はこれによる。

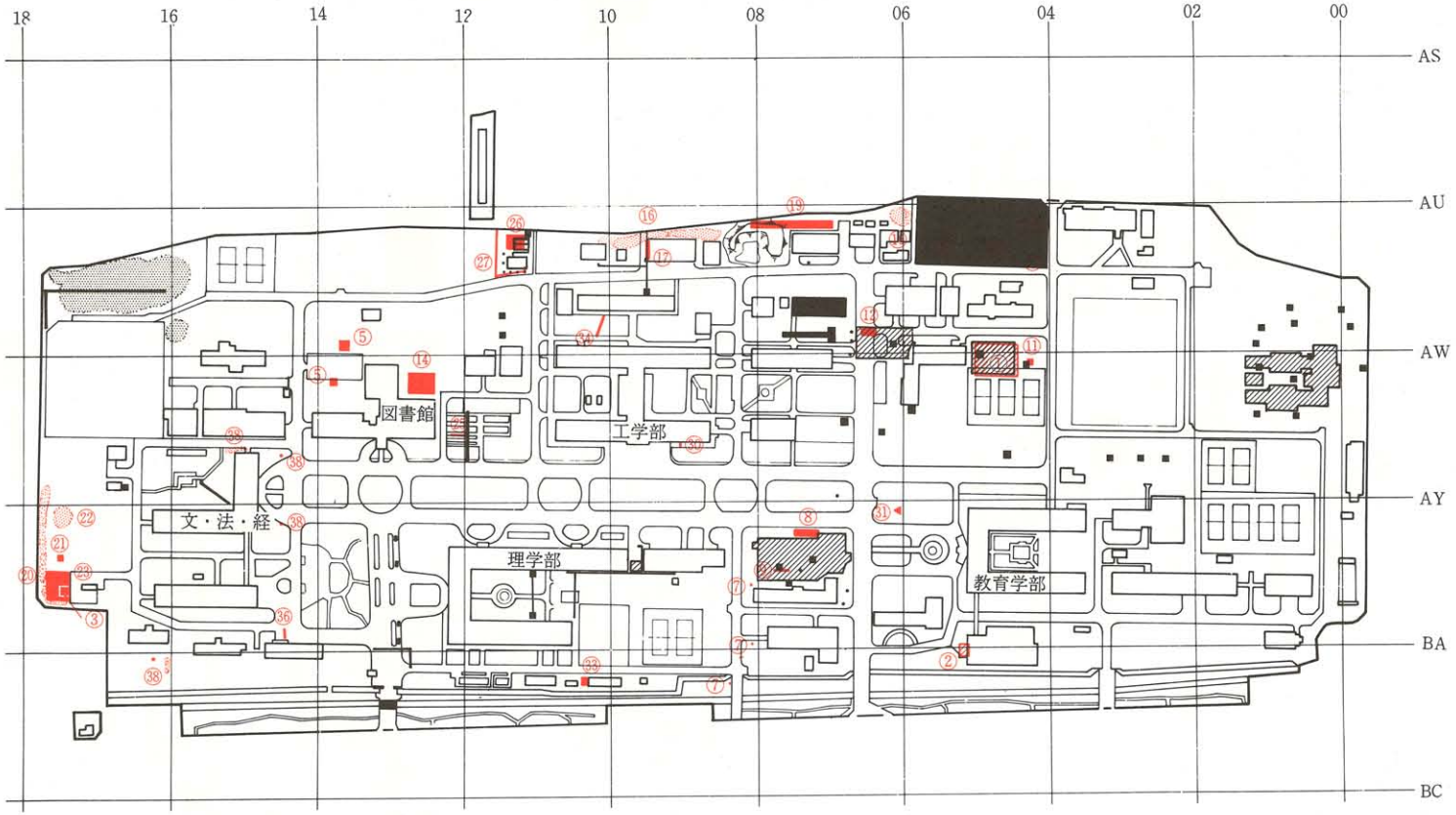
『新釈備中兵乱記』　1987　加原耕作編著　山陽新聞社

『中国兵乱記』はこれによる。

『岡山県の考古学』　1987　近藤義郎編　吉川弘文館

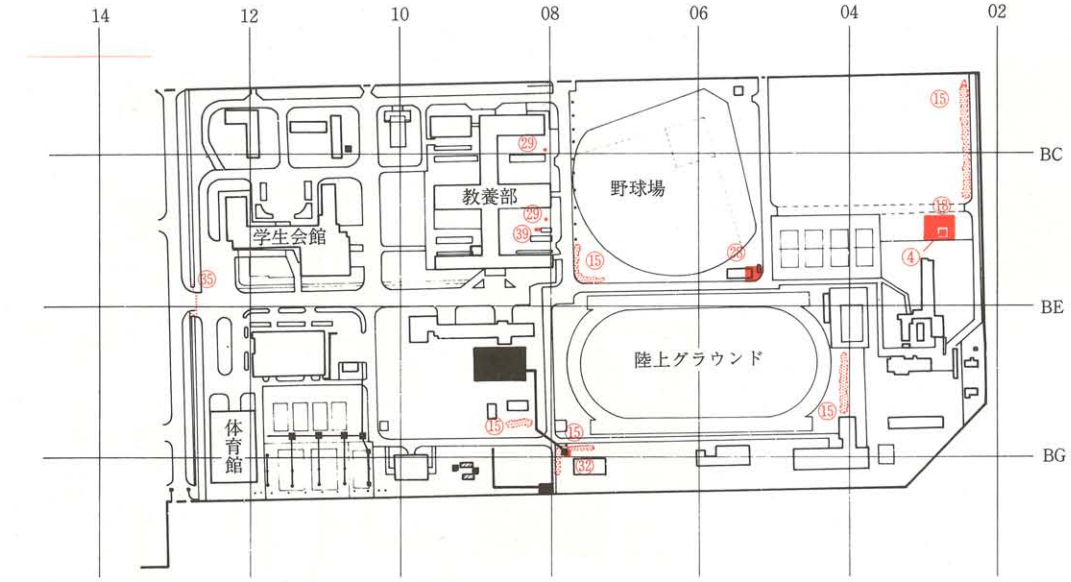
『土木』講座・日本技術の社会史 第六巻　1984　甘粕健ほか編集　日本評論社

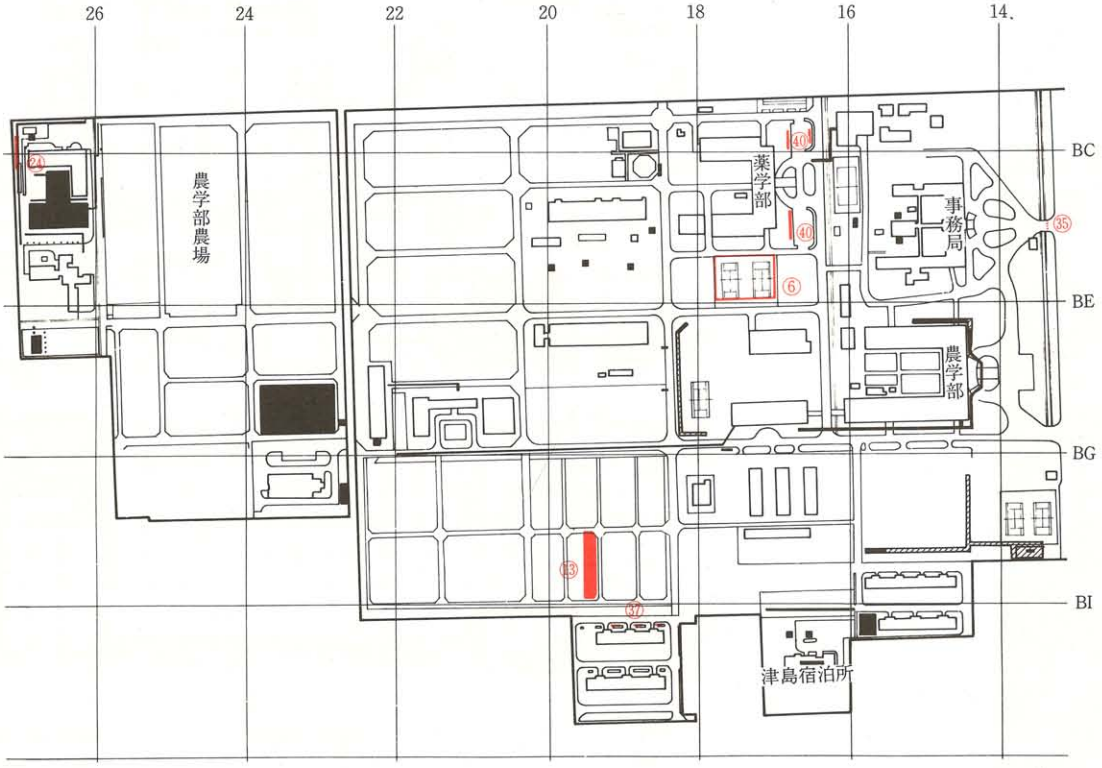
図版一　津島地区全体図（縮尺1／12000）



図版1　津島地区（縮尺1/5000）

図版三　津島南地区（縮尺1／5000）





赤印部分：1989年度調査

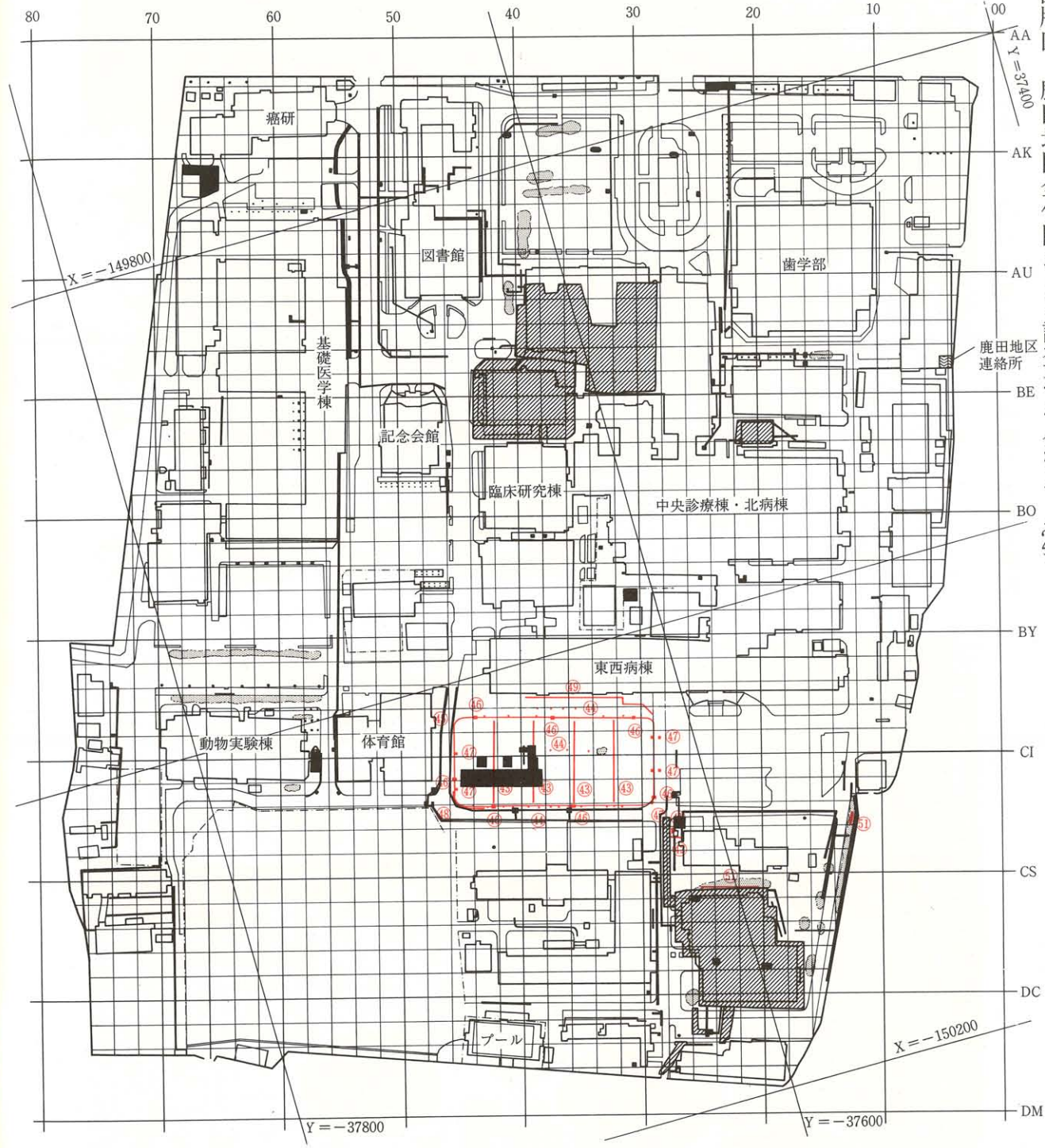
黒印部分：1988年度以前調査

発掘調査地点

樹木移植地域

0　200m

図版四　鹿田地区全体図および調査地点（縮尺1/2500）



赤印部分：1988年度調査

黒印部分：1987年度以前調査

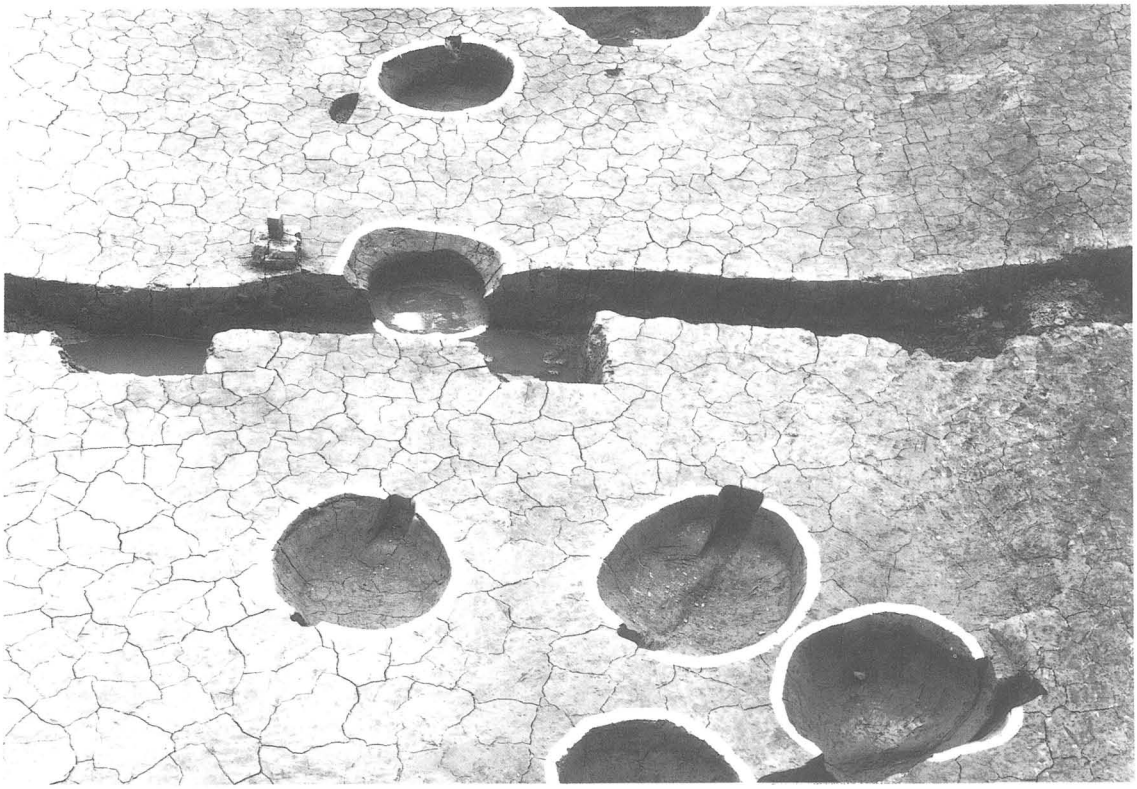
発掘調査地点

樹木移植地域

0　100m

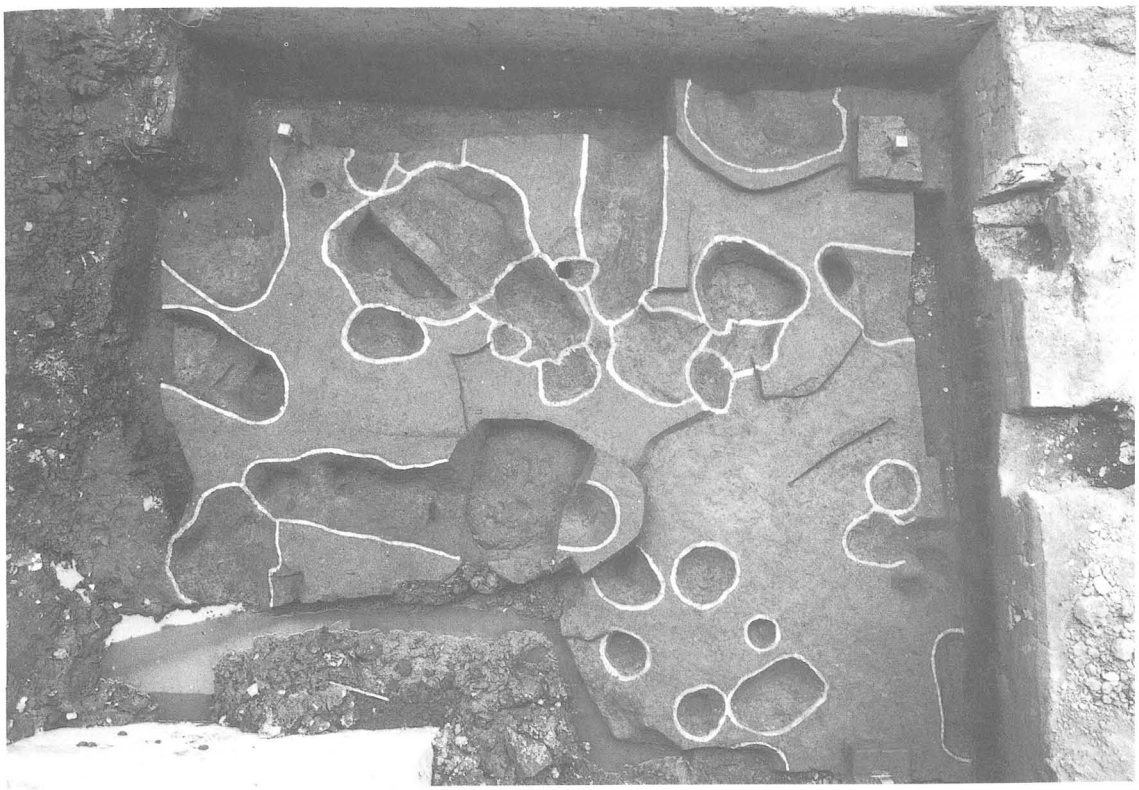
図版五　津島地区（工学部生物応用工学科棟予定地発掘調査）

1　アンペラ出土状況（SP02，東から）



2　17層上面検出貯蔵穴群（東から）

図版六　津島地区（教育学部身体障害者用エレベーター予定地発掘調査）

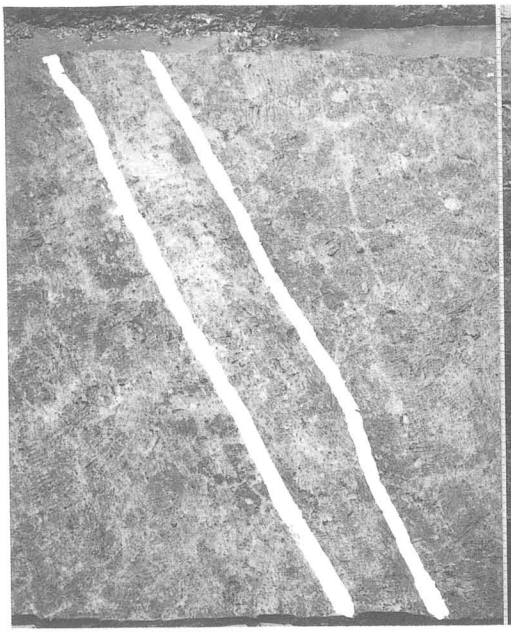


1　完掘状況（東から）

2　西壁土層断面（東から）

図版七　津島地区（学生合宿所予定地試掘調査）

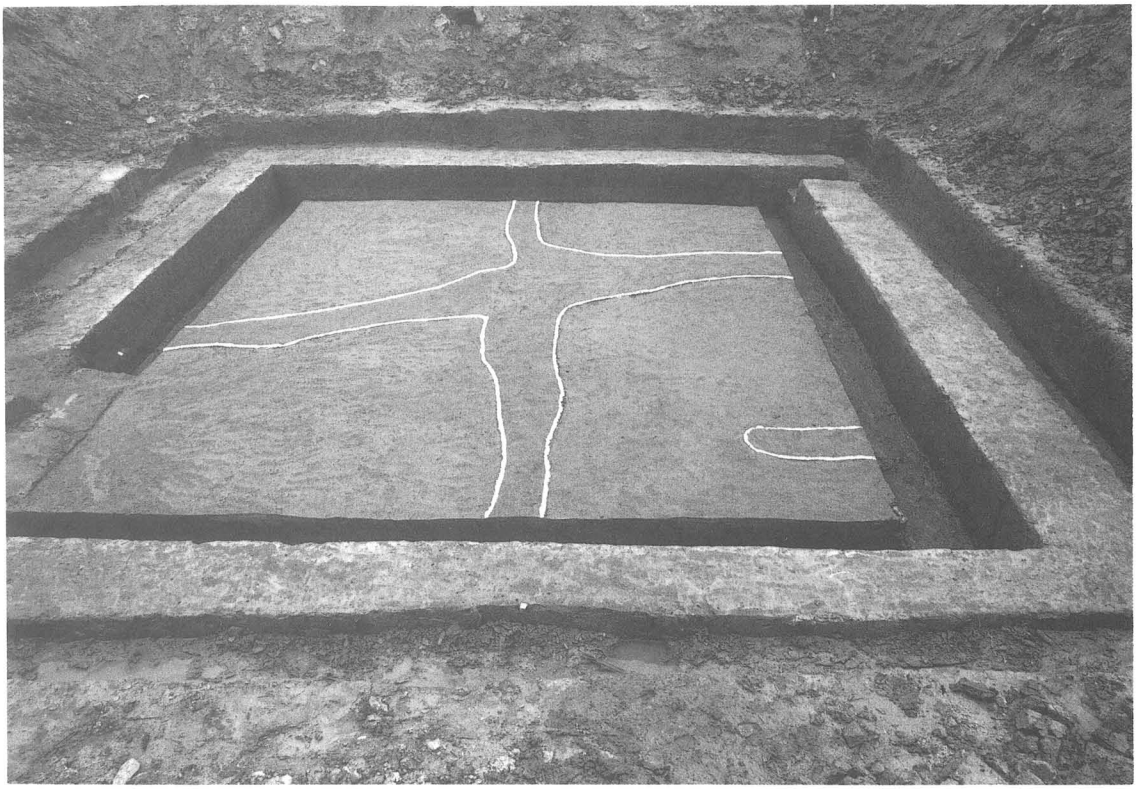
1　北壁断土層断面（南から）



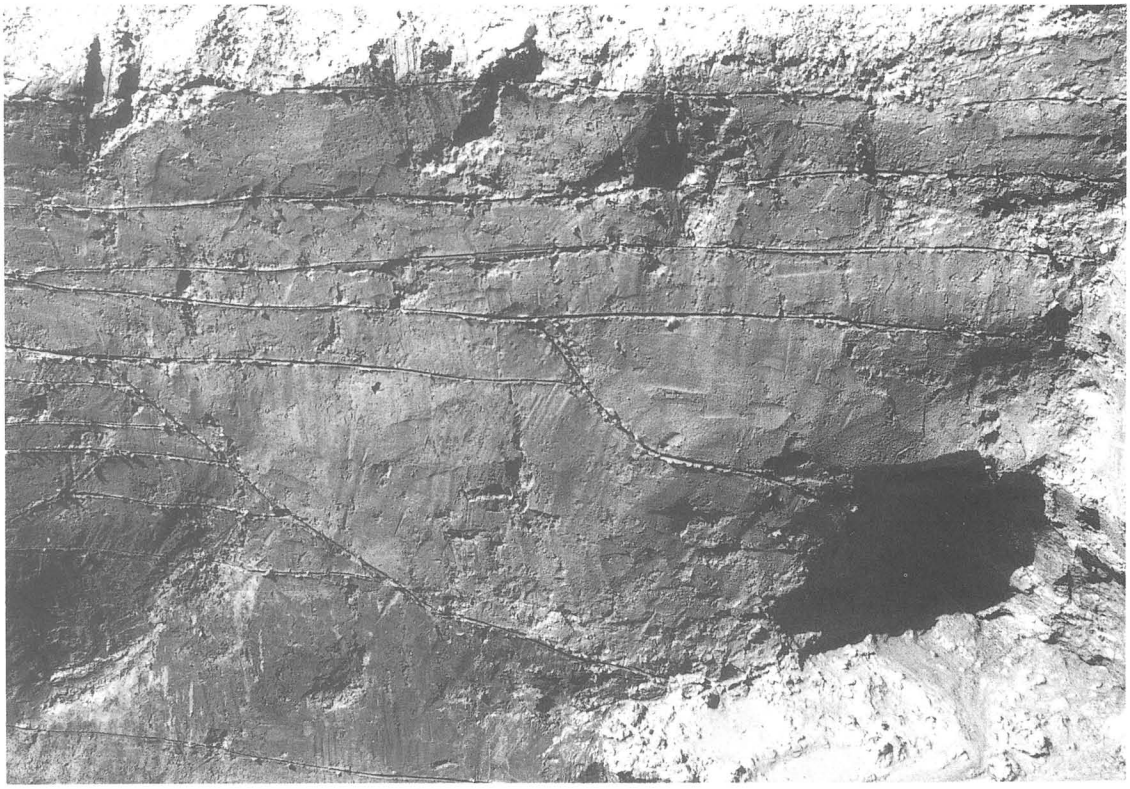
2　13層上面検出畦畔（東から）

3　13層上面畦畔断面（東から）

図版八　津島地区（附属図書館予定地試掘調査）



1　7層上面検出水田（TP1，西から）



2　溝1・2断面（TP2，東から）

図版九　津島地区（埋蔵文化財調査研究センター施設）

1　埋蔵文化財調査研究センター施設（西南から）

2　常設展示室

1990年11月15日　印刷
1990年11月20日　発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報 7　1989年度

編集　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
発行　岡山市津島中 3 丁目 2 番 1 号
(0862) 52-1111 (内線246)
印刷　サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2
(08669) 3-2121㈹